

入繪

赤烏帽子都氣質

# 赤鳥帽子都氣質

## 序

人已を知らざる事を患へ己人を知らざる事を思へず。但我を立る故或は藝を好み其道に半達すれば夫而已にて大海を知らず。人を詰り身を高く凡て遊藝と名付る事がやうの人より出づ。何れ藝術の源上皆治國平天下に至らしめん業なり。衣服に紋あり。人に藝ありて損なき事を思ひ。亦宣蒙の徒を防ぐたよりもならむかと此質を擧て五巻となすも僕が無體の中に只管と好む醉中のくだなんか。

永井堂  
作者

友

# 赤鳥帽子都氣質總目錄

## 卷之一

八幡宮の社内をまいりするが深い樂み。賣物見世と一時に仕舞て戻る奉燈の掛行燈  
 附り 小野小町も及ばぬほど自慢する雨乞の發句は一六に掛て見て身體のねじ直し▲佛法の有難事を忘れ  
 ぬ富貴な酒屋に歌念佛のこぐろ節

## 卷之二

上手ぶるを見込に引て見る番頭の袖にすがりし懸の上首尾よう抜た言葉の理屈  
 附り 庚申と一時めぐりあふた節分の豆て目出たい一首の狂歌▲我子を滅多に自慢する親父の心とは眞に  
 違ふた子息の孝心は若い人のよい手本▲不幸な息子の腸をひつくりかへした女郎のいきさつ止め  
 て止まらぬ親父の涙

## 卷之三

古風な淨瑠璃の咄に乗て來た拍子聞を勤める一人の娘  
 附り 大な聲を自慢する中老の昔咄は二階から下へ響のするせりふの一聲▲流石は人體のよう見える謡  
 の藝能はやしを好む惜家の弟子分▲よい年をしても見そこなふは謡にかたよる心からの腹立

## 卷之四

大坂の町宅は離波橋筋目によい在所の噂を聞いて集る近所の朋友

附り、客を見懸て手に取る書物は青表紙の學文を見せる唐棟の柱損▲生れ付た痼疾持の咄を開て呑込む癌醫の手柄。段々匙の廻るほど信仰をする近所の評判▲金居臺の下ヶ札に太ふ害付たよい衆の名前遠くから見ても読みようで讀めぬ所のある手跡

## 卷之五

唐まで聞へたよい女房持た男の自慢顔が少しうるさい髪の生際

附り  
一時に出る人魂が行當て兩方へ顛と別れた丑三の夢の様なまこと▲二度とない若い時も時なり折も用意の蜜柑饅頭を拾ふて悦ぶ近年の大當り▲料理人の手の内は見事に止めし刀のきつさき柔にあらふた三味線の早業

# 赤鳥帽子都氣質 卷之一

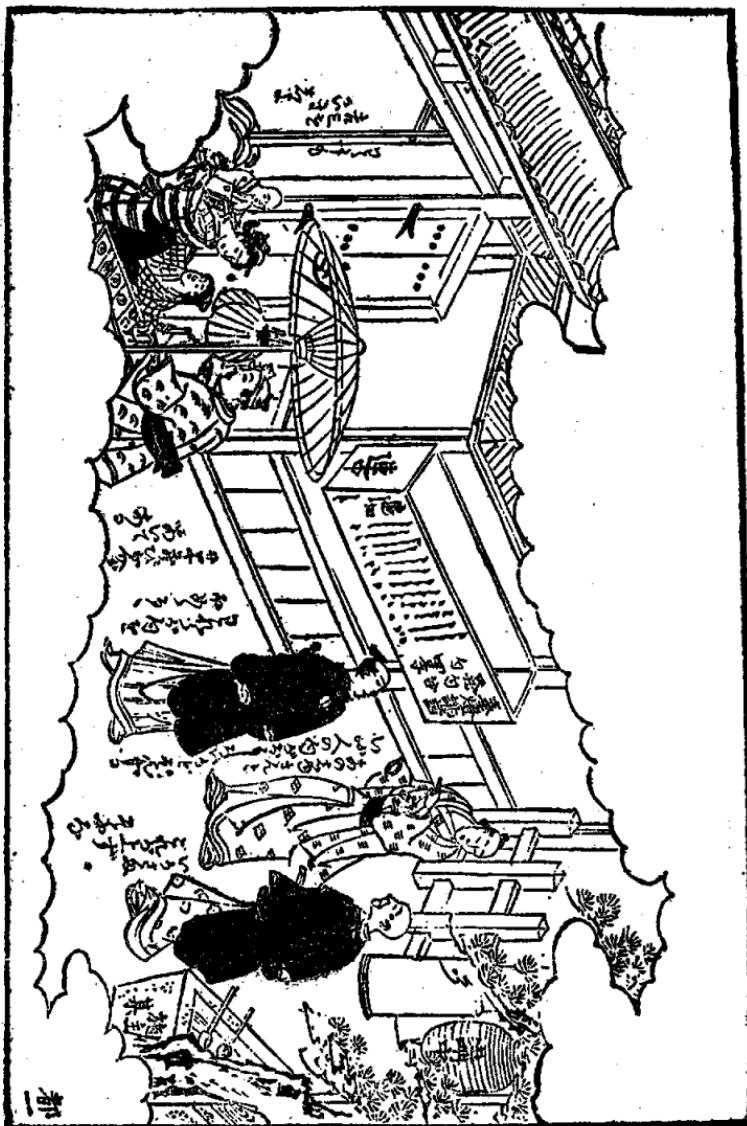
第一 八幡宮の社内をまい／＼するのが深い樂み賣物見世と

一時に仕舞て戻る奉燈の掛け燈

附り 小野小町も及ばぬほどに自慢する雨乞の發句は一六に掛けて見て身代の

ねぢ直し

富ある時は好み習ふ所の遊感氣を點じ難を散じて友だちの興あつく。若不仕合になるとも其藝能身を助くる事は名人の發句にも云ひ侍りしとかや。實に此道理に符節を合せたる物語あり。中京・西洞院といふ所にて手廣く近在近國へ異服物或は鎧道具等を商ふ新屋句十郎といふものありけるが。二十計の比より不圖俳諧に志し。上京で名高き宗匠の門人になりて手讚と俳名をつけ。所々宗匠家の月並會などにも出席して百員歌仙の付合に巻引さげて戻る時は鬼の首取て來たやうな顔して悦び。朋友に見せて我と我手讚連中云ひ合て發句の相撲、或は御靈御所八幡薬師など御縁日には奉燈の發句をあげ。自分の發句・卷頭か軸などに出し時は日の暮を待かねて八幡薬師の縁日へ參り。人々の參りのやうな體にて奉燈の發句を行燈の穴のあくほど詠め。參詣の人々が自分のした句をよみ上げ手讚と俳名など讀てくれる時は自節に嬉しさをひいやりとうけ。只發句行燈の邊へ賣物見世見てはまいもどり／＼して樂むなどおかしかりき。さて一年々々豆數重なるほど好の道にこりが來て春興は勿論春夏秋冬多雪月花の發句をはでなすり物にし物入構はずと知るほどの人に送り。點印を捧げて徐々樂點を押し。宗匠なりこそはせね我ほどな上手は京大坂にも希ならんと思ふから手讚といふ俳名を所々國々へ響かさんために江戸長崎までも春帳・集選みの發句に一封添へて



くだし。諸方より樂詠頼みに來ては、庄屋々々といふが嬉しさに。かりそめにも俳友に酒などふるまひ。俳諧ほど智を磨くものではなく。とても智恵薄き人の得せぬ事と心得。家とゝへ身をさむるの學文には心付す。文盲に奸ける故族商ひも大方二人ある手代を下し。たゞ一自分が下る時は俳諧の行脚ばかりして商賈體はそ／＼。此句十郎父には幼き時に後れ。母の養育にて三十一の年女房を入れしが。今四十一になりて八ツと五ツとなる女の子二人に七十三の老母。家が古うなるに従ひ物入は多く。二人の手代も見るを見まねと俳諧を樂み。旅商ひにも氣がぞべ／＼して番頭は江近路へ商ひに行きて代物残らず銀にして所の庄屋殿の娘を連れて何國へ驅落せしやら行方知れず。二番の七兵衛といふ手代は大和路へ商ひに行きしが大坂へ廻りて北漬で米を買賣急に下りをうけて代物を失ひ。生玉のばた芝居へ這入りて義太夫節のよほを語つて居るを連れて戻り歸人へ預けるやら。彼の七十有餘の老母も老病で西方へ旅立しられるやら。句十郎四十二の厄だり頗と不仕合の盡し俳諧になりて。無疵な五間口の家屋敷入貰五百目といふ印のすはつた借銀。年始始め町中からせり立れば親の譲の此家もどうで人の寶になる不仕合。女房も今氣が付て夫へうらみ口の教訓。餘り俳諧に精が出た故に身上の便き何暗からんやうにして親父様のおかしやつたを人付合と明春の參會遊宴に入あげてしまい。今二人の子供に正月布子一つして着せることの出来ぬやうな此困窮。俳諧ばかりなら此やうに急に皆にもなるまいが第一おまへの酒が過る故俳諧の會といふと。いつでも戻は祇園町や川端の大酒。比論念なうねてゐる二人の子供はかわゆふないか。手代共が悪うなつたも皆こなさんの身持が自墮落ながら出來た事。親御達へ此家賣てどう云ひわけをし給ふと夜更て妻が泣くどく諫に。句十郎骨身にこたへ泣も泣れずさしうつむき蒲團に喰付ぬたりしが。其夜は一日も得寝もやらず翌日より句十郎女房子供の不便さに。どうぞゆがみをねぢ直さん心。願立所々神々へ祈り／＼心を改め町分よりの借銀を来る七月晦日限りに銀済さば家渡す相對にて断り立て。不時のもうけに心を碎き時節到れと祈りしが。裏なき金の縁なければ唯徒らに月日立ち。はや七月になりけるが。珍らしや其

年は入梅もからつゆにて虎の涙の雨さへ降らず。殊に六月の闇をこめて百日の大旱魃。水に盡せぬ都の町の井の水さへかつするくらひ。町々火事の用心に老若男女心を付け。朝夕雨を待ちけるが降るべき景色はなかりけり。惜て此旱魃につきて句十郎不思議ひけるは最早百日といふ日なり。殊に日々所々の雨乞天のたすけお上の恵み。時節到来八九日によもや降らんといふことはあるまじ。此を目あてに銀まうけの工夫あると何思ひけん俄に旅装束立派に整へ。女房にあらまし様子を語り七月十八日に宿を立て十九日に和州今井郡へ着きけるが。此郡は富貴なる百姓商人の多き所。句十郎も前より商場にて知る人多く。所の庄屋へ行き云ひけるは。私此度當地へ下りましたも外の儀ではござりませぬが。此度の旱魃別して大和路は厳しく水渴して田畠日やけのよし。所を私一句の發句をのべて村の氏神へ奉納いたし。来る廿五日より三日之内に大雨を降し申さん事妙不可思議の覺えあり。併し願の通りに雨降る時は京都へ歸り大社々々へ御膳御酒を捧げて御禮を申。或は御神樂をあげて諸人の參詣に餅などを撒とらせること。其外非人へ施行何かに大分金子のいる義なるが。此を私工夫いたせしは。若願成就して廿五日より三日が内に大雨降れば村中並に一軒より銀子五分づゝ申うけて。それにて入用整へ御禮疎ららず仕ますつもり。若し又千に一ツ雨降らずして祈きかぬ時は鳥目一錢も申うけず。罷下りしんどを利にして歸るつもり。先へ物を申うけずと雨降らしてから後で家並に申うける銀目五分づゝなんと思召す氣道のない代物。村中へ只今御觸なされて下ざりませぬかといへば。今井郡庄屋徳介大きに悦び倍々親切により下りてくれられし。今雨さへ降れば軒役に五分づゝは心安いこと。此照がまあ三十日續けば一向水も飲めぬ。急に村中へ觸流し仕やうといへば。句十郎は笑顔に入り發句にて雨を降らせしことは百年前も例しある義。是は江戸に昔し其角と申す名人の俳諧師が淺草の邊なる三國の稻荷大明神へ一夜こもり。夕立や田も見めぐりの神なればと申す發句を奉納いたしたれば。忽ち天かきくもり大雨降りしこと疑ひなし。此時も後で御禮に大きに物入れて御膳を所々へ上ました。又小野小町の雨乞の歌は申さずとも御存知と辭に任せていへば。い

よいよ庄屋横手を打ち。夫より村中へ觸れせば皆々庄屋方へ寄りての悦び。雨さへ降れば五分や一匁心安らう出しますと。此庄屋より隣村へもいひ送り何れの村も承知して二日が内に二十ヶ村ばかり願主出来し故句十郎が思ふほし人にいはず心に思ふは。わしがやうな發句で雨は降るものでなけれど百日餘りも照り續けばもう如何なりと降る時分。殊に所々雨乞もあり。なんでも三日の内が勝負ものじやと輕れるやうに思ひ。儀廿五日の朝所の氏神八幡宮の神前へ上下で上り。京の町へ鈴振て来る中臣の威い聞覺えたほどを大音上で述べ。神前にて發句を大高の紙に認めしを見れば。雨祈る蛙は池の小町かなと不出来な發句認め。大声上でよみければ。百姓たちは感心して如何さま池の小町とは。尤もな發句じやといふ内にそろゝ空が曇りしが百姓共顔見合せ。いよ／＼不思議に思へば。句十郎米相場の移りに拍子の付た心。七月廿五日なる故入幡様の前で天神様を祈るやら。たわいもないもちやくちやなお經のやうなことをいふて四ツ時分までかゝつて居る内に。そろゝ雨がほろ付き出し。段々ながせ雨の仕出しになりて九ツ過より車輪を流す大雨。大和一國が聲上での悦び。今井の庄屋は鼻高うして句十郎を神さまじやと扇て仰いだり拜んだりして宿へ連れ歸り。偕て二十ヶ村へ觸れ廻して伴の五分づゝを集めけるが。家數一萬千二百三軒に五分づゝ集銀が五貫六百一匁五分。又富貴な百姓は五分づゝの外に金子百疋銀五兩などの祝儀。小百姓も五分の外に十二銅などを添へ持るものあり。都合錢も金も銀に直して拾七貫六百目といふかたい銀をもうけて七月廿九日に京へ上り。女房にも悦ばせ町借残らず返済して身上のゆがみを直し銀貰目ばかり入れて所々神々へお禮申すではないおわびを申し今は心も安堵して一世一代の句に

ぬれた手て栗つかみけり臂のあめ

此發句をしてより俳諧の附合を止め。手譲といふも取置てよい人物になり。近頃より行の餘力あると朱子の學文とやらを心がけらるゝよし實に珍らしき仕合なり。

## 第二 佛法の有難い事を忘れぬ富貴な酒屋に歌念佛の二ぐろ節

附り 同町の一人と三年三月張合て石より堅い銘々の物好

現の禍を見て過古未來を知れと佛說文に教化し給ふを聞し時は。今生にて禍多く賛謹なるものは。或も後の世に生を受しとて樂しみのないことかなと捨扶持うつは大きな心得違ひ。其處てこそ精出して申ためる念佛三昧。十惡五逆の罪人も教ひとらんとお世話をさるゝ如來様の御意に入るやうに。唯六字の御名の仕込さへ強ければ。今生での惡念も薄く未來で樂しむこと疑ひなし。現世の惡きものさへ斯如くなれば今此世で仕合のよい人が心立直にして念佛に精出されたれば夫こそ未來はよき筈のこと。此うまみを此世から呑込んだ永樂屋長介といふ男下京にて隠れのない造酒屋の主人なりしが。現代々の念佛家にて其長介未だ三十五六なれど明暮念佛三昧に心を盡し。商賣用町儀の外は佛道の沙汰より他事なし。朱にまじはれば赤うなる。炭屋の男は黒うなるの道理にて此家内は女房子下男下女丁稚までがお念佛を申し。酒米踏む歌も男共が工夫して歌念佛とこぐろ節のやうに語へば主人の氣に入て折々褒美などとらざることあり。此やうに家内召使ふものまで歸服するは其一家の主の徳ならんと自身我を讀め。念佛者の自慢氣になりて毎朝毎晩普願寺への日参。珠數を袖の内へ入れてつまぐり歩行きても苦しかるまじき事を人の目に立つほど向へ突出し臂張つてつまぐり。口に六字を唱へて道中を行く。若葉體などに逢ふ時は川狩の好な人が魚の淵に跳るを見付たやうな顔して懲に回向し。鳥さしが雀でもさす時は人間も恥ず大聲立てしやぎり聲てお念佛を申所々寺々の談義へ參ては近所講へ行て説法の買出し囃し。奸姦ひの差別なしに他人に唯念佛を勧め。氏神の祭よりは十月の十四日五日を悦び。此世をしまって未來へ行けば座敷でも建て待てるやうに思ふて朝夕を暮し。知縁近付に往生人があると其體かけつけぞ。ごぢう相傳を受しありがたき物語をして死人にも是を授け。土砂とやらいふものを持行きて往生人の目鼻口耳などへ

入れ。是では佛がしづちとばらぬ。手足まで歌らかになるて萬事に氣を付。折々宿で真臘念佛とやらを室内打よつてつとめ。此大會には木魚などあしらひて。いよいよ信心を懼させるなど。さても若いには珍しい念佛の行者。少し自慢氣はあるといへども。どだいの尤もな心得おのづから殺生も出來ず。人に憐みもあれば、聊の失は誰ありていふものなく。極樂の長介殿と讀めぬものこそなかりけるが。妻に懶た念佛者故か此人の失は。惡じやれな念佛嫌ひなもの無理に佛道へ勧め入れんとしらるゝ故。金言耳に逆ふて折々は人と喧嘩しらるゝが癖。勧めかけて聞入れず少しでも念佛を妨げいふものがあると氣狂のやうになつて腹を立て。又聞入れるものあれば我子よりも大切に思はるゝ心得の氣質は一かう頗もしかりき。さて此長介南すぢむかひに伊勢屋加茂兵衛とて織田山田へ手代を下し御師方諸事入用の物を詣込む商人ありけるが。家内妻子始廿人ばかり富貴なる事し。此加茂兵衛は若槻なる時より神道を行ひ。神の國神のたねより生來て神の教を知らぬ身ぞうきといふ去神主の和歌を日々心に忘れず。神書もよほど見て日しよきの神拜怠らず。朝夕中臣の祓をして神道口傳の拍手を打ち。清つきを委しく吟味して。他人の火を喰合ふて来るものにも穢れたる火は廿日といもの茶烟草を飲まさず。一門の外他人は如何ほど懲意の方にても自身葬禮に行かず。名代にて萬事を仕廻ひ道中にて葬禮に行合ふと道より歸りてかかり湯をして出直すなど。初もむづかしうきんじにきんじたる清め行儀なる勤なりしが。同町にて富貴肩を並ぶる佛道者の永樂屋長介なれば。町儀の出合等にて度々神道者の加茂兵衛に付合ふ事なれば。神道に凝固りし加茂兵衛をいぢらしく氣の毒に思ひ。何とぞ此人を佛道へ勧め込み有難いお念佛を申されるやうに教化したきものと。これを明暮大願に思ひ折々夜分見廻に事寄せ行きて。石のやうな神道者に佛道御法の沙汰をして。我が願ふ道へ誘引せんとしらるゝは誠に大佛殿を蟻がせゆるよりもまだるかりき。加茂兵衛は又是ほどの念佛好を神道へ勧め込むこそ神明への御奉公。日本の本に住む務なると思ひ此方よりも折々長介宅へ行て神代の巻など講釋して神國の道理を述べ。聖人の誠め給ふ異端の虛無寂滅の教を説て心を盡されけれ共。中々

馬の耳に風の吹くやうにも見へず。されど互に我好く道へ勧め込まんと思ふ故、出合て喧嘩はせねど心の内は双方敵味の方のこん競べ。兩家の家内奉公人に至るまで張合になりて三年三月といふもの勧め合ひけるが。何れともかた付かず。一向近頃百日ばかりは神佛の競合止みけるが。誠に佛方便佛法不思議の世の中。或夜加茂兵衛上下着て長介かたへ來り。何日もより懸念して亭主に向ひ両手をつかへいはれるは。今晩改め貴公にお願ひ申すことあるは。我年來神道を行ひ佛道を語りて邪見無縫に暮せしが。今四十五といふ年になりて合體ゆきしは舊來の朋友或ひは知縁近付などにも。老少不定の有爲眞愛之情離別を見るとか身根にこたへまして。急に佛道へ入りたうなりました。今夜より貴公のお弟子と思召して佛の御法の有難き事をお聞かせくだされと神妙に長介をたのみ。早口に六字の名號を唱へられければ。長介はすく立上りて悦び。加茂兵衛が背撫さりて。扱も／＼有難やでかされたよ。其心が付くといふも即ち如來様の御縁が深いの。此娑婆世界は即ち火宅の床と佛の説示し給へば。未來を取外さぬやうが肝腎。其未來が祓ひ給へ淨め給へては一向行きませぬこと。お念佛さへ申さるれば。外に拍手拍つの水浴るのといふやうなことも入らず。唯一心に南無阿彌陀佛々々々々々と長介五臓より念佛搾り出し。僧夫より夜食酒など出して加茂兵衛を馳走し。其夜佛法沙汰にて夜をふかし。夜半過に加茂兵衛も退出しられるが。二三日過ると朝の間に加茂兵衛長介方へ行き。貴公へ御無心に参たは御所持なされる土沙を少々所望致したしといはるれば。長介早合點して。扱はおしるべに往生人が出来て。此中お咄し申す通りに土砂を用ひてお世話をさるか。近頃まで神道に凝りし貴公が夫ほどまで佛道氣になり。拙者に土砂をくれよとは。はて神妙や有難い思召や。これと申も佛法の世の中故と笑を含み悦びければ。加茂兵衛も亦嬉し氣に。土砂と申すものは死したるものゝ口目鼻へ入れる時は何ほどしやちばりかへりたる骨身も軟かになると承りましたが。いよいよさやうで御座りますかなと問はるれば。長介うなづき。さうともさうとも。さだめて貴公もお近付がたが御一家衆の往生人にお用ひなさるお心であらう

など押返し／＼間はれるが。加茂兵衛真顔にて死したるもの歟かにいたすと聞きましたは幸ひ。私昨日見事な鱈を一足買ひました。いかうしやちこばかりて骨身のこわさうな魚故。目口腹へ其土砂を入れて料理いたし。水菜入てせんば煮にいたし。骨あらは酒の粕いりなどにして食る心で御座るといはれしが。長介は一向あきれて物をもいはず。神道者につまゝれし無念の怒りは念佛でも押へ難くぞ見えにける。加茂兵衛は氣強くも座を立さまに腰中より一首の狂歌を取出し。大黒柱に張付て宿へ走り歸りしが此狂歌を見れば

極樂は百味の食と聞きつれど出來合たべてこゝにをりたや  
初も此狂歌はこうそつな趣向じやと今に世上の曉なり。

赤鳥帽子都氣質 卷之二

第一 上手ぶるを見込に引て見る番頭の袖に縋りし戀の

上首尾能抜けた言葉の理屈

附り 庚申と一時巡回ふた節分の豆て目出度二首の狂歌

口は是禍の門舌は是禍の根なりとは古の詞なるが。清言清事をいふ時は萬善の根ならんや。只朝夕慎むべきは一言にて事を壞らざらん聖人の教を忘るゝ事なけれ。俗人の我とお寺様の茶屋ぞめきとは扱も値の安い者じやと望町邊の吳服屋の店先で手代共が打寄ての判談。十人計取巻て居る煙草盆にあるいけ炭園の火より眞赤な狼の尻笑ひ。此吳服屋の番頭藤介といふ男も鬼角諸事少々覺た遊藝何かに我の強い氣質。主人へ帳面取引に少しも間違ひせぬ事を第一の自慢顔するさへ可笑は是奉公人の常なる事を。我ばかり直き様に我はり聊の耳學文にて出入の職人方杯へ行ては今岡氏より買出した謡の譜釋。近年狂歌を始めかけしが片意地に是を好み。他人の祝儀不祝儀共に只かりそめにも狂歌を讀て送り。朋友の出合にも酒事何かに狂歌して廣い京に我程な狂歌よみはよも有まじとの自慢顔を見込んで讀そやす者には田も畔も遣る様な男。出入の張物屋が此穴を見付て藤介を狂歌の先生に頼み節季節季に張物代の先借を心よう聞いて貰ふ計り。下の町へ見世出した魚屋の息子が狂歌の樂點を頼てよりお出入の魚屋になるやら。鬼角藤介が好の道より付入て讀るとは知らず上手ぶるは藤介ばかりでもなく。總て俗人の間々ある習なりき。然し色欲の道にかく迄深くばおとましからん。既に番頭藤介より三番弟の宗介といふは生付色白に見るも利説そなる美男なりしが。只色の道に心深く最早三十一の年に合點せずばと心得て見ても情ないは美男を戀したふ女多き故明暮色情の道標に暇なく

ぞ見へにける。然るに此異服屋の主人は村田徳右衛門とて江戸にも近年店を出したる富家なる故内室娘の侍女送器団より風俗やさかたなる女を召使ひ日々華美を盡して遊山芝居の噂のみに暮されけるが。過し九月より五年の年季きはめて奉公にすみし侍女のきぬといふ女。生得愛敬有て容儀尋常なる生れ。よしある武士の浪人の娘なりしが。父には後れ母の養育にて十六の年より此村田氏へ初めての奉公。嚴しき母の常々言聞かせし通り勧の内不奉公なきやう假にも男と小話も慎む事人の中言不義の取さた是れ女の謹大切に守るべしとの教訓を一日も忘れず。主人大事と勧めれば何怠らず家の氣に入り。上紅白のお絹どとの異名取る程の首尾なりしが。彼宗介きぬが目見へに來りし日より早色情深く見そめこれ迄繋りし女も多きがあのきぬ程の位高い風俗器量は見ず。何卒此戀こそ我が一身を込て首尾整へ二世迄も云かはして女房にせずは置くまじ。此願成就せば身一代外の女に目は付けまじと心に願立して九月の末つかたより文認めて懐中へ入れ日々の首尾を伺ひけれども。元來物がたき主人行儀正しき家風なる故墓所にて男女席を同じうする事なし。いつ文届ける首尾合もなかりしに宗介色道に功者なる聲明者いつの間にやら人しらずおきぬの手に文渡しけるが中々母の武置きし通り返事に小學の古語を書入れての断文。宗介はきぬが手跡の見事など小文字ある様子に驚い勝る懸念の張合。俄に大和小學の書物集めて三間半程ある文認め懲しき餘を書いて書て書たくりしが。彼女も宗介が男のよいと利を柔かに書述し文通とに頼と打込み。母の教訓も打忘れて得心の返事。十月の中比に宿の法事を言立て二日主人に暇貰ふて宗介へ内通し出合の酒事に互に堅い夫婦の契約。かい是が序の糸口きぬが心も亂そめて我が方よりも折々は文にて事問ふやうになり。傍聴にも知らざず互に心を通せ奉公も大事に勤めけり。はや其の年も暮からり極月廿六日節分と庚申と一所の夜なりしが。富家の格式にぎはしく家の上下祝儀をのべて年をとる。主人徳右衛門始め内室娘残らず格子の内より厄拂を聞きらるゝ内。おきぬ宗介裏へ出てくらがりにて互に手を取り耳語居ければ番頭の藤介は今宵杯は格別に火の廻念入るが心得事と手提燈さげて一人城の隅へ行ける時。宗介と

侍女きぬとが手を取て小話するを出合がしらに見付けければ二人の者も是を見られてのけでん。ちと小意地の悪い番頭ゆゑ宗介二人に何とも云はず藏々の隅々を廻りけるが。直に云はぬ程腹脇苦しき二人の當惑。是ぞ大事の破綻とおきぬはしくしく涙ぐみゐるを。宗介が一つの工夫恐るゝきぬをも見やらず火の廻してある番頭の傍へよりてこはさうに袖を取り。逆も穩便に成され下されとは申されぬ拙者が不増。詫たとて見脱されぬ番頭職の貴公。三十一文字の和歌にも並らぶ狂歌の上手と云はれし貴公も此二人が不義不埒はよし情を加へられても憐の狂歌などは逆も讀列らる事は出来ませぬ等。若氣の至にて色に迷ひ狂歌に名高い貴公さへ口吟の御趣向を得なされぬやうな悪事を仕出すとはなんたる此身の因果ぞと。思へば我が身が五月蠅と泣聲小低うじやくりしが何思ひけん。番頭藤介懷中より矢卓取出し鼻紙にさら／＼と書認めて宗介へ渡せば其儘推戴き披き見れば二首の狂歌。今宵の節分庚申と一時なるを賀してと前書きありて

年々につもれる懸は庚申見ざる聞かざる人にいはざる

節分にどうですたれる豆なれば拾ふ人とて誰がとがめん

かく二首の狂歌を宗介うれしげによみ上げければ。番頭藤助はよめぬ處をよんだ顔。エヘンと一つ脣拂ひ高い鼻毛を宗介によまれて内へぞ入りにける。

## 第二 我子を滅多に自慢する親父の心とは眞に違ふた

### 息子の孝心は若い人のよい手本

附り 不孝な息子の腹をひつくりかへした女郎のいきさつ。止めて止まらぬ

親父の涙

子を見る事親に如かじとは古人の詞宜なる哉。人の親として子を育つるに教なき時は、則親自己苦を求むる道理なれば幼少より不敬なきを教訓すること肝要なりき。經書の聖言は云ふに及ばず只幼少より虚言と物の負情して我をたて我を是とせん事を戒め育てたきものなりしは。坂せんばの立町筋に管笠柳行李木履下駄を手廣く商ひ近國へも仕入下し常見世賑々數難波中の小店へも代物を卸して下駄屋といへどしつぱりと銀のばして内證ゆたかなる商人なりしが。夫婦共物事に我の強ひ氣質たゞ人に負る事の嫌にて萬に自慢氣な男なる故。近所町内でも餘り人の愛せぬ人物。商業相應の家號も梅櫻屋の喜左衛門とて無病な生付なれど近年強い疝氣が持病と成り。是さへ負惜な心から二年前迄無病など自慢したに。お年の氣で禦りが來たものと人に云はるゝを無念がり一門より外他人には疝氣で引るといふ事を嫌ひ。京へ買ものに登られしと云はせて二階に引籠りあるやうな我もの。女房おかちは夫に星目の上強氣の勝た負をしみ。人にはいはねど此無病な親父の近頃疝氣病に成し病根といふは。今年廿三になるひとり息子の善六といふが世間に稀な惡性物にて。第一が兩親のいふ事を聞かず日々に不幸の惡體が上り。人の女房近所の娘や下女をそななし。遊所又は小宿などへ這入込で晝夜たんまり内にはゐず。氣體のあり丈云て朝夕食するにも様々の好み。たまたま内に寝ると朝は四ツ半迄の高斯召使ひの若者丁稚下女迄かりそめの事も叱りこかして親に口明さぬ惡者。是が喜左衛門の屈託。此喜六生付で器量のよい奇麗なる息子故幼時より喜左衛門夫婦が我子の美童を自慢し。十五六より男になると猶々自慢氣やむ事なく。自身はめいたはりける故人に惡性者といはれん事を無念がり。是程の野狼息子を世間の人々に穢しるる故の疝氣といふ持病。是ぞ眞に子故の闇といはんか。此喜左衛門むかひに島木綿を商ひ三尺手拭湯手拭頭巾風呂敷などをあしらひし見世を出しるる吉兵衛といふ者ありけるが。是も夫婦共物事に負きらひの我な氣質なりしが。廿二になる吉三郎といふ息子。二親の氣性とは格別の邊にて萬の事に我を立す。器用なる生付に算筆も人に勝れ達者にて商の道にかしこく。人品柔和にて諸人愛敬あつて第一兩親へ孝行を盡す事は近頃名高い京西の

岡川島村の百姓にも劣らぬ息子なるゆゑ親吉兵衛夫婦の息子の自慢して人々に孝心の話。器用なる物語を尾に懸つけ  
て海魚では鯛か川魚では鯉か人の息子ではこちらの吉三郎かと文盲な醫事いふ吉兵衛が手始め。むかひの下駄やと此木  
綿やとは貧惜同士故年中火をする程な不和な中にて下駄屋の息子が不幸不埒なる事を吉兵衛大に笑ひ近所町内でも  
噂してなんじけるが。喜左衛門は又むかひの息子が孝行になると商に精出す事を自慢する故近所の人のほめるを開く  
たび毎に負惜の立腹。我張な女房おかちも共に無念がりて何卒むかひの息子が悪性者になる呪はない事か。逆もく  
ちの息子の野狼は直をらしと暮明是を工夫して暮せしが。狼の肝の黒鏡と狼の糞とを極細末にして野良猫の小便に  
てねり。みぢんのやうな丸薬にして酒にて飲す時は何程たまなか息子でも俄に淫亂になつて痴癡いて短氣にして志  
悪心になるといふ妙薬を去方にて聞出し先此薬味を整へ丸薬をおかち手づから持へけるが元來不和なるむかひの木綿  
や故。吉三郎に此薬用ゆる事出来ず。これに當惑してどうぞ飲せて悪性者にしたき事と思ひくらす折節。吉三郎少々  
鬱病にて引入ゆるよしを聞き。是幸とおかちが女心の愚痴なる工夫。近所に住ゐる俗頭の按摩けんぴき現銀廿四文  
の家分を立し吹竹勇介といふ人の所へ夜分在宿を考へて行き。勇介へひそかにあふて頼みけるは御存じの通り私家と  
むかひの木綿屋とは前々より不和の中。喜左衛門互に町議て出合はれますはほんの表向ばかり。其故私とても向の  
内儀とも往來は致しませぬが。さりとは向どうしにて見受ますに。しんびやうなるは息子の吉三郎。商事に精出  
して来るほどの人に愛しらひよく。あの頑固な親達へ日々の孝行。不和な私らても見世先で顔見合すれば懇懃な歓  
禮。親達は懸けれどさりとは向の息子殿は愛しう存じます。向も手前も追付縫取て代を渡し。隠居致すは知れた事。  
其時は町議てもほんの付合させ手前の息子にも親孝行をあやからせ。年よるまで友達にさせたふ存じます。私が喜左  
衛門殿へ隠しての下心。聞けば吉三郎殿此間は氣鬱の病気が出ました由。たまかな人故若し長引勞咳の様にても成まし  
ては私が願も成就せず。其故あなたをお頼み申は手前へも向へも御療治にお出なさるお前ゆゑのお御無心。私親里よ

り傳説けました。一子相傳の妙薬氣うつ一通りは何ほど重き勞煩でも只一度のむと直り氣がいそ／＼なります此丸薬、観里の妙方ゆゑまだ息子にも呴しませす。特には嫁ても入れ代を渡してから傳へまする程の薬を此比觀法いたしましたは。是を向の吉三郎殿へ飲せたう存じますが。不和の私なれば向へ參りたうても參られませず。又一通の所よりやりましては毒な物でも進ぜるかと親達が疑がはれますはされた事。是をお前様の御家傳にしてどふぞ吉三郎殿へのませて下さりませうなら悉く存じます。病氣がなほれば、則お前のお手からに成る事。薬代が參じましたらお前の方へお取なされ。私は可惜息子を病人にしとむなひ心計り又繩て中直る時事によらば云立にも成りませう。いやもう向と向で中の悪いと申は氣の毒な物でござります。是と申も手前の喜左衛門殿が片意地なに。向の吉兵衛様もかたもくろながら起りますこと。何からなれば子供の不便さから色々の事が出来ますと涙ぐみ。則是は此度のお世話にあづかりますお肴料と銀子一包差出して頼みければ。少し欲氣のある勇介が早速のみ込み。さりとは御尤な思召付明日見廻ます時勧めて吉三殿にのませませう私の申事はよう聞かれますすればお氣遣ひなされますなどいふ故。おかち喜び勇介内儀へも懇ろに挨拶して勇み勇んで躊躇はふできなりぬ。扱此勇介と云は辯舌よく人に取入る事の上手な愛のある男と見ゆれど。心の内はせじにすばしかきすづば。近所の息子や手代の遊里へ行く中宿にて文の取次色茶屋の拂銀を請取渡ししてやるなど親切にのら蓮の世話やきなる故。喜左衛門息子喜六も勇介方は寄合所。母親おかちのかへられし跡へ遊里より戻掛けて立寄りしがいづにないすめぬ顔付。内儀が様子を問へば臺詞のある女郎をよその客が十日の揚詰。是は顔の立たぬ事と思ひしより鬼角此頃氣色が悪うて少し嘔が出てうそはらが立てこたへられぬ酒も酔が出ずと氣が塞がる。勇介様何ぞ氣色の急にようなる薬があらば下さりませとあがり口にふんぞりかへりて手を出せば。勇介が幸の試み。此おかち殿の樂息子にもかくすとあれば我等が家の妙薬にして用ひて試みせんと思ひ。直に氣の轉ずる妙方ありとて三包ある丸薬を喜六に一服酒にてのませけるが。不思議なる哉暫くすると藥的中してむつくと起上り

しが。根が悪性で淫亂なるのら恩子に併の妙薬を用ひたるものゆへ鐵砲の玉に帆掛ける勢。勇すのかよは見る度毎に器量が上るといひ様亭主の前ともかまはず内儀にはふど抱つき。聞くだんせ北のしんちのかの鳴した我等が相方のおいとめが私が返事が遅いとて田舎の客に十日の約束しをつたればどうも此男がたゝぬ。其土客めが座敷へふん込んで臺詞せうと思ふたれど昨日から氣むつかしさに元氣が薄く其儘にして戻たが。こゝへきて勇すに丸薬を貢ひ其をのんでとろ／＼とねたればきやうに元氣が付てめつたに腹がたつ。こゝなかゝ衆のやうなよひ色を見ると亭主を打殺してなりと思ふ懲は遙る心と。いふに勇介肝を潰し是はどうて本性ではあるまいと叱つたり宥めたりするを喜六が面倒がり。亭主がたしなみの尺八を取て振廻せば。勇介内儀氣をもみ取さへにかゝりし所をしたゝかに打すべければ。内儀育ばねをおもしな叩かれ目を廻せし故。近所の人を頼んで喜六が親喜左衛門を呼ぶに遣しが。喜左衛門來て様子を開てのびつきり。しばらにもたゞきふせうにも力強うて中々手にあはず。うろ／＼してゐる中に此内の出歯庖刀を提さげ大はだぬいで北の新地として駆出しければ。負おしみな喜左衛門もなき／＼追駆ゆきしあとて勇介内儀もやう／＼氣が付て育ばねの痛み強くうん／＼うめく所へ。喜六母親おかち駆付け始終の事を聞いて當惑せしが。身から出した錆江詫てもかひなき恥のかきあき。されども仕合は此の新地より喜六を手籠にして若い者共が連來りし故すぐに親の内へ通歸りて町所への聞あれば俄に座敷牢を造りて喜六を押こめ。勇介内儀養生料町所への付属に一貫目餘の物入にてやう／＼事納まりしが。木綿屋吉三郎は病氣全快して親孝行にするを見る度毎に立腹しても叶はぬ事叶はぬ事。

# 赤烏帽子都氣質 卷之三

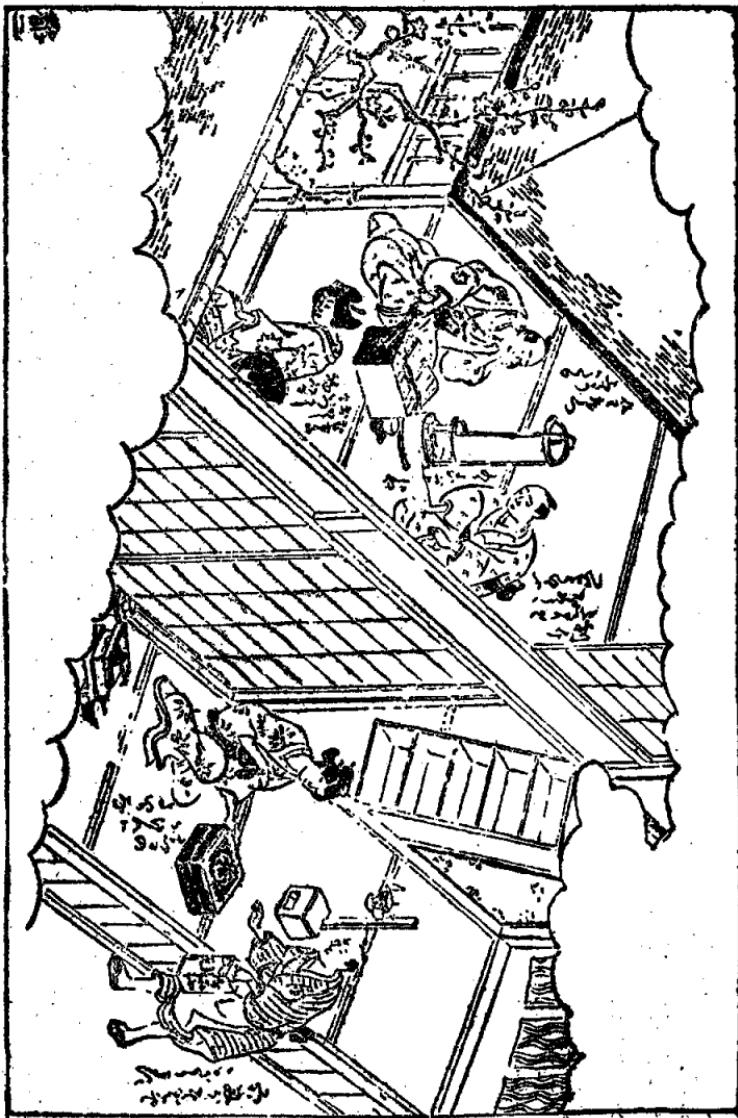
## 第一 古風な淨瑠璃の咄に乗て來た拍子聞を勤める一人の娘

附り 大な聲を自慢する中老の昔唱は二階から下へ響のするせりふの一聲

額の長いは福人の相。頬の長いは大人の相。萬に好嫌ひのある人は貧者に少く。多く福貴なる人にあるものならん。是古の詞に見へ侍れば。私は何嫌ひと申す事なく。少々は蛇の鉗でも喰ますなどといふも。餘りよからざらんものかやと。思ふにて。虚なき聲を慥に聞き侍りしは都町人の有徳なる暮し兩替と米間屋との二見世米錢屋の金左衛門といふは五十有餘の人物なりしが泉州堺より若い時登り身一代に稼出しかく迄手廣う身上仕上たる男。銀六といふ廿一になる息子に同商賣の銀持より稼を取り舅姑嫁子の中睦じく。手代下人多く抱へて繁昌に暮されけるが。此金左衛門萬に好嫌ひの多い男。別して娘の第一が先遊戲にては謡と茶の湯。食物にては酒と川魚。嗜好物といふは第一が義太夫節の淨瑠理と角力。食物では蕃椒と醤類。身一代に銀延せしほどあつて萬に資蓄が好なりしが唯若き時分より稼の中に淨瑠理を稽古し樂とせしかど聲が餘り大過て頓と甘味美し味のない音聲。殊に聞と拍子の悪い癖な生得なれど其身は天晴れ義太夫節の上手顔。十八の年より大坂の政太夫が弟子になり其後京でも名ある太夫に稽古して三十八九の年迄十八九年の修行なる故節とこつと聲のうづらとは飲込切てゐればこそ今五十の餘に成て息子共に懸して折々劇場の朋友などにて所望しられかたるに。まだ聲が落ませぬなどと。心安う唱合ふ所へ行ては。かりそめにも自慢交りの清稽噭。只しつほりと思ふまゝに聲張上かたつて見たうても。今は親且那様の御隣居様のと内外のもの或は近所借屋のもの迄に尊敬しらるゝ身分にて町參會の東山行とても此五六六年はむさと一節もかたら

れす。何卒人目にたゞめ世間で噂してこれぬ淨瑠璃聞たがる方があらばかたり聞かせ樂しみ度ものと明暮これのみ心掛ねること可笑かりき。金左衛門樂の身故毎日近所心安き方へ畠にまはりける。道二町下の町の煙草入屋へ行き牌の親類中へ進物に遣す煙草入を五ツ六ツ調へけるが此袋物屋の利助といふは三十二三なる利發者。女房は一ツ二ツおい女房と見へて目から鼻へぬけそうな辯舌のよい笑顔よし。十三四娘の子おいしといふは少し此節不快のやうす。金左衛門煙草入代銀拂ひ茶を持出る娘を見て色悪く不快らしき様子を尋ねければ少々虫氣に人々勝れざるとの噂はて器量よい子なるがいとしやとて。灸治あるひは聞おぼへし妙薬の咄などして煙草二三ぶく吸あられければ近所でおとにきし米問屋の親旦那。是がえんになるも商の手筋と思ひ夫婦が出てお旦那様あしらひ。お有離いのお結構なこと追従を大白の砂糖捏ねはし。歸らるゝ時は利介夫婦が既て門送りするに金左衛門も心よう思はれ折々通り序には利介方へ立寄り少しの物など説いてはゆるりと咄などして廿日許にかい百年も馴染だやうになり夜分も咄にて利介が夜などの仕事先にて昔の若太夫活潰さては政太夫が元はさこ場の十兵衛錦太夫が俗名は綿武といふた事迄知つた自慢の淨瑠理也。利介が淨瑠理は得かたられと耳功者聞く事の好な噂に女房お品が心からそこへ義太夫節の好な口上。金左衛門笑臺に入て手前らが若い時稽古した最中とは違ふて今時の若い者は淨瑠理の解語うみ字の吟味をせぬゆへ節が只いやらしい。廿六年前に四條の今第後が芝居で盛衰記の淨瑠理政太夫の重兵衛が二切で源太が観當場。昔の島太夫が三段目の笛引。死だ紋太夫か四段目の鐘の段。いや又此時の様な面白い聞事はなかつた。其時代を見ては今時の淨瑠理はかたるといふ名計。こちらは其廿四五年前の太夫に稽古した節故聞く人が聞くと甘味が知れると演じて話されければ利介夫婦は感心して喜び何んと旦那様御内々て近夜かたつてお聞かせ下されまいか。手前の二階の奥座敷でおかたりなされば表へは聞へませぬ。何程大きなお聲成されましても兩國へ聞へます計り。北國は只今明塵。南隣は女夫對の職人二人ながら義太夫好。幸ひ裏が一所の借屋寄から聞人に呼て置き外の聞ては私家内親子三

人何卒お頤ひ申ますといへば。金左衛門願ふてもない心嫌しさ。先づ其夜口明じやとて北條時頃記の雪の段をかたられしが。さりとはむしやうに大きなとんきよう聲にて其くせ拍子の悪い淨增理なれど。利介夫婦がお前追従小首傾け感心して耳を側て聞きゐるを。金左衛門はいよいよ自身の節聲をよいと思ひ。夫より折々利介方にてかたられる。扱ある時利介女房に云ひけるはその方もする通り近年こちの不仕合。一人の娘は虫氣にて長々の物入。去年以來工夫した山事も皆中途にぐれたれば急に出来た内證の大借金。逆も煙草入縋ふて賣る位で大金はもうからず。それ故一つの才覺は。上の町の米問屋の親且那。不可淨增理を譲て聞くを喜び度々当たりに來ること幸い。よう取入て銀の無心を云掛る積なれば娘も氣六ヶ敷とおもしろさうに見せ掛けて聞いていよ。其代に病氣養生氣體にさせ。よい小袖捲へて取らそうと女房子に懇談すれば。實に尤よい心付とて淨增理の譲やう聞きやう迄工夫して云合せ。扱何ぞ馳走せんと思ひしが、麿類が好なる由を聞きし故。薔薇切を先近日の會には振舞ふ積。どうて元入せねば金にはならぬとて近所の薔薇屋へ行き度々薔薇切調へる事相談が置き。金左衛門咄に見へると薔薇或は餌飴を振廻ふて淨增理をかたらせく十會ばかりもして後彼大金の無心云出す心なりしが。九會目の夜分は隣家の間人も入れず不快な娘に云含め金左衛門の淨增理聞きとむなくとも。しんぼうして今夜は側て聞いてゆよ。爺が仕合のようなる事じやといへば。蟲積より氣體の症なる娘故おとなしう飲込。利介夫婦悦て今夜は何でも淨增理一二段済み薔薇切しんせてから彼一件を願ふ下心。暮前より座敷を出來待掛けるが。程なく金左衛門も見へ直に二階へ上りてはや自慢の顔付。今日は去方にて薔薇を裏應はれ亭主が自慢の辛き薔薇なれど拙者好物故何の子細もなう二百計ふた茶碗に煮てあるをむざくと喰たれば亭主もあきれて其やうに薔薇を上りましたらお聲も出ますまいと云し故。青原の三段目を大きな聲で一段語て聞せたれば家内の者我をり。今二三段語り聞かせよといふたれど。今宵はこれの娘が病氣の聲故に聞たがられる由のお願にて無理に斷りふて此方へ参りしと恩にきせし挨拶。利介は何でも有難いごかして親子三人金左が膝元へ倚りて聞き



しが。景事道行二三段語りて四ツ時分に審麥切共五せんしてやり。こゝは一つ腹へらしに隨分調子高う上げて忠臣蔵の九段目を語り聞せんとの機縛。三味線なしの素淨瑠璃を我等程達者に語る者はあるまいがと。時々自慢顕して鼻を仰山にかみ。拟も常より又大きなびどり聲で語られるが面白い事はなうて氣が上る計。娘は不快なれど親の爲になる事と思ひ金左が膝元に坐り勤めて、迄は聞たれど氣がくたびれてそろへ眠り出しが。精神の波より恐ろしい夢を見てゐる時。金左衛門・山科の隠家にて由良介女房と戸なせとが臺詞の所を大聲にて語りあられしが。詞の論義にすつかり身を入れ。拟もとんきよくな聲にて。フンこりや聞所お石様と乘懸つて語られしを。娘のお石が癡耳に入り。びつくりしてすつと立。ねはれんや。どうに迷ひあれいといふて逃走りけるが。悲しや二階の上り口より眞逆さまにずでんどう。箱梯子の下にて腰骨をしたゝか打ちしは。眞に梯子にはすねといふも愚なりぬ。利介驚きあわて。娘の介抱に取紛れしが。金左衛門も氣の毒なれど詮方なく暫し何かの差圖云て内へかへりの延引すると。若し格別世話でもからんかと是をあんじ。夜半時分に宿へ脱てぞ戻られけり。娘お石は其より腰抜て膝行となり。金の無心を金左衛門にいへば頼ゆへ淨瑠璃語つて聞かせしに。それから付入り銀借せとは不埒な男じや。此方昔から質物なしの素貸はせぬといふての立腹。さりとは笑止なるは利介夫婦。其年の暮に審麥やの拂が拾三貫五百廿四文といふ書出し。職商の手間仕事多の夜なべを毎晩休んで淨瑠璃本の前に二丁宛立た。蠟燭の拂まで不時の借錢。是を思へば手前の身上不如意に成かゝる時。銀持の親父や息子が心安ういうて遊に來るとして。滅多に物入れて付込まれぬ當世の人心。只其身の家業を大事と精出し心を直實にして朝夕神佛を祀り誓を卻けて生質の美を顯す時は貧者たりともそのなりに天の助。人の一生何あんじる事なしに樂がらんと思ふに。此利介は若い時より人に媚説ひて山に拵つた男ゆへかかる難儀。然し親に似ぬ金左衛門息子銀六は慈惠ある人。内證で金拾兩心付せしゆへ娘をつれて大坂へ下り。難波の骨接へ行て腰抜は治りしが。さりとては口喰ふて一ぱいな事じやと利介夫婦は是に懲りどうさい。ほうど消息つぎに

けり。

## 第二 流石は仁體のよふ見える謡の藝能囃を好む借家の弟子分

附り よい年に成ても見損ふは跡にかたよる心から俄の腹立

偏ならざる是を中心といひ。變らざる是を庸といふと教へ賜ひしは古人の詞。此語を引て騒ぐも恐入る程の愚なる偏屈な物語なれども目前見聞したまゝの實錄を書侍るは。かの淨瑠璃好金左衛門居宅の上の町に所持の抱屋敷ありけるが表の家數十軒ばかりの小借屋。裏には長屋を建ならべし借屋にて諸商賣の小體なるもの多かりし内に。伊介といふものは繪草紙道行本の類取賣の小商見世を出し置て。伊介は淨瑠璃の指南太夫といふ程にはなけれ共。素人の分では功者な淨瑠璃。近所小息子。手代すんま。心安いを幸いに數十人稽古に行きけるゆへ。毎夜々夜の深るまで三昧線の音も聞へけり。此長屋の向て一二といふ身上がら金左衛門商賣の米とは質とを業にする萬屋右衛門といふ男ありけるが。扱も珍しい程な譜好。幼少より譜をならひ今四十に餘る迄日々の稽古譜の口傳神文して残らずゆるしをうけ。慰みがてら人にもをしれる位になりて。いよ／＼面白さ増し。朝から晩迄譜のみを心に思ひ。稽古の外道歩行にも口の内にてば／＼と譜を語ひ。我程な譜の上手はあるまじと自身己を讀て譜の上といちづに喜び。淨瑠璃小歌など謡ふ者は人外のやうに思ふて一向付合もせず。町儀の參會などにて年ばいな人が謡うたはぬを見ると。さすがは俄分限者丁稚奉公烟草盆の掃除よりへあがりし悲しさは小謡一ぱんさつぱりと得うたはずまし。くさくさして居る體。さりとはあさましい不便な者じやなどと宿へ歸ると女房子に云聞かせて人を三文もせぬやうになじり。夜道あるけばねり物の様に雪踏をしやり／＼と引すり。口元に八の字なりな鐵をよせ。武藏坊辨慶のやうな顔付して謡をうたひ樂まれけるが。彼町の金左衛門が借屋にある淨瑠璃やを甚だ腹立。始は草双紙商ひと思ひしが近頃

より淨瑠璃指南を渡世にするよし。水さして宿換せんと度々町で噂すれど。此町の年寄大腹中で仁心ある人ゆへ頼と取上で沙汰しられず。七右衛門齒接く思ひらるゝこそ理り共云はんが。此淨瑠璃かたり。伊介が南國にゐる仲七といふは。うつし物あるひは香包扇の繪をかく職なりしが。是も誰を好き萬屋七右衛門を先生に願み毎夜稽古に行きしが。ある夜七右衛門方にて仲七唱しけるは。御存じの通り私となりの淨瑠璃や。近頃は段々弟子共がふへまして。夜分は八ツ半迄も譲ぎ抜々やかましうて困ります。夜前も私妻が用事ありて隣の淨瑠璃やへちよと參り。女の事なら聴聞てをりました時。かたり仕廻ふて伊介は先生顔にて弟子の若い衆に向ひ。此九兵衛様は久し稽古に見へぬがどうじや。病氣でも出はせぬかと云たれば弟子の内より八兵衛といふ男が申すは。いやもう九兵衛は義太夫を止めるつもりそな。なぜになれば近い頃から國太夫節面白がり。跡月より綱太夫が所へ弟子入して國太夫へ打込んでゐますといへば。伊介が義太夫の先生顔で。音曲事のうちで國太夫節程下作なものはないに。九兵衛様は變つた物好。國太夫けいこしやうよりは謡ならふたかたがまじやにといふたれば。並ゐる義太夫節すき共が如何様。これは先生の尤な氣の付け所じやと云ひましたげな。妻もこれ見てかへり私へのはなし。如何に文實なとて國太夫節とうないと同じ位に思ひ。己がすきの義太夫節ほど上品なものはないと心得たが可笑うござりますと。何氣なく七右衛門に聽すれば七右衛門赤面して大きに腹を立て。拔もそれはにくひ事をぬかしをる。能はやしにしては御上の御祝義になくて叶はず。神をいさせて則ち御神樂。御大名は申すに及ばず町人百姓の祝義事に謡なつては動まらず。淨瑠璃小歌はなうても済むもの。其至りへた藝を國太夫と一つにぬかすは聞くも無念ががらはし。此事を云立にし二ツには近所の野良息子のら手代共が夜更るまでさはく事を失取り。急に家換させて見せませう。伊介も貴公も金左衛門が借屋なれば。貴様が嘗した故伊介の難儀と心得。淨瑠璃好の金左衛門なれば貴様も家換云付るは知れた事。其時こそ幸ひ横町にある手前の借屋十六疊敷の格子作り。今日からでも貴様に貸します。とも〜に尻もたしやれと端的

に町の宿老へ行き様々とわらたきしが。近所子息手代の夜ふかしを宿老も氣の毒に思はれ。家主金左衛門を呼びよせ急に家がへを云付られしが。金左衛門淨瑠璃好故いろ／＼取繕ひ云て見ても叶はず。伊介を又外の町にある我が借屋へ宿換させ。仲七が水さしてより起りし事其上謫好が氣に入らぬとて急に又仲七へ家明けを云付れば。仲七は兼ての合鑿萬屋七右衛門借屋へ早々家換して双方事納まりしが。五十日斗り立つと謫好の七右衛門方へ心安う来るもの小聲に成て咄しけるは。こなたのお借屋にゐる仲七といふもの。見かけは柔和な人品なれど大な山者の大騙りなるよし。元は西國方にて武士の浪人じやと云ふげなが。頓と出所の知れぬ者じやといふが定説。七八年前長崎で有難な町家に二年奉公して居たる時。主人の金三百兩と主人の姿とを盗んで京へ上り。則ち今仲七が女房といふは其姿では是も志の悪い女。亭主に呑込ませて密夫さへ三四度もして大まいの銀を取た由。此方の借屋へ來てゐる事を彼長崎の町人が耳へ入れ。近日尋に參ると申す事を去方に承りし故。御心得の爲め御咄申し置くと云ふを聞て。七右衛門大に驚き。何卒今日中にうけ人へ渡し度とあせらるゝ中に。はや彼長崎の主人より付届けはより段々六ヶ敷成て事済むまで三年餘り程かゝつて家主の物入が此間に銀で九貫三百匁といふ用。扱も存じの外なる謫うたふたと七右衛門はあたまかゝられしが。淨瑠璃語の伊介は金左衛門借屋へ行てよりよい弟子が段々付き。勝手よふなりし上に室町邊の去旦那が蟲負をうけ。三貫五百匁て家貰ふて貰ひ。繪草紙の本見世をにぎやかにして下女の一人も使ふやうになりし故。家の金左衛門は頭さすつて悦ばれしを見聞した事疑なし。扱も世の中の事は面白可笑い油斷のならぬ物ぞかし。

# 赤烏帽子都氣質 卷之四

## 第一 大坂の町宅は難波橋筋目の能在所の噂を聞いて集る近所の朋友

附り 客を見懸て手に取る書物は青表紙の學文を見せる唐様の柱樹

詩に曰、白圭之玷、尚可磨也。斯言之玷不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>磨<sub>レ</sub>爲といへり。しかれば白圭の玉は玷ても磨けばなるべきが言葉の玷たるは直る事なし。故に入々言こととを謹しみ儉約を守りて表向の義理ある禮式の音信にしわん坊の名目を取らず。只絲直を專とするこそ萬民の知徳ならんや。しかるに自身己を讀て我鼻高といふ面部の病症を顯す。人のぶり見て我がぶりなをせと昔より云ひ侍りし世俗のたとへを今こゝに。大坂難波橋筋へ近頃より奇麗なる小座敷を借宅して。已讀多高右衛門と名乗り何渡世のやうすも見へねど夫婦ながら常に絹物を賣し暮されしが。とくと噂を聞けば生國は讀州丸龜の人にて筋目よき歴々なる上し。二人の中に九ツになる娘の子一人。十四五なる下女に十三になる丁稚を召使ひ。其身は物髪にて文才ありげに常に唐の書籍を手に觸れ。かりそめ人に挨拶するにも漢語を遣ひ。醫書は大方見盡し何時醫を行ふとまゝなれど療治にかゝれば貴賤に交はらねばならず是が面倒なるゆへ未だ此業を施さぬなどと立入る人への噂。儒學を第一に怠らぬ拙者なれば儉約を專にいたす。是をいひ立にして隣家近所の俗人を集め酒を出し見せけるが。是を聞く近所の人は職人商人なれば一向詩などはよめず。平仄韻字が如何した譯やら知らざる故何を見ても六ヶしきことばかり。如何さま物識の筋目よき有徳者と感じ入ぬ。然るに此高右衛門筋向ひに如才無能見したる事をかりそめにも酒のうへにて唱し。様々の手柄をせし物語り詩文書などはまで所々にて作りしを文庫より

とて佛醫ありけるが見掛よりは甚だ文才ある人にて醫學は勿論佛道神道の書も暗からず詩文も達者なれど是は近年知らぬ顔。生得酒を好み惡き癖のなき上戸なれど兎角來る人毎に酒をふるまひ。其身も日毎に三度といふ酒はかゝさず飲ば人に詣ひなく物ごとに慈悲を思ふ氣性故とんとあればあるだけの暮し。療治も巧者にて病家は佛醫に歸なるほど多く評判よき人なれど。此ありたけ暮にて僕の一人も未だ召使はれず。夫婦かけ向ひにて節季々々は一杯調度の身代なりしが根が正直なる仁故近所隣の鳴に彼の高右衛門が文才何かの噂を聞き奥ゆかしう思ひ萬事に手を置く町内といひ殊に向ひどうしなれど。物ごとに遠慮をし。折々顔を見合ひ目禮するにもうやまひ尊敬しられるが。高右衛門は無庵佛醫なる故文才薄く我が醫學の噂を聞て萬事に手を置き薬剤の尊敬ならんと早や無庵を我が胸中へ入れ。或日無庵宅へ行て心よう挨拶し。少し學文自慢をして餘は一向宗の祖母かゝを道場寺のお住持が愛しらるゝやうに云て夜分御閑暇にはお咄に御出なされ。承はれば貴公もお酒が御好物のよしを南隣の紙屋十兵衛殿に承りました。拙者も甚だ好物。折々は十兵衛殿や北向ひの古手屋喜兵衛殿など打寄て樂みますが古人も儂以養レ性。諒以修身とあれば。とかく學を好むものは儂約を専といたすが一つの道を行ふなれば互に驕を横み酒事なども集錢出しにいたし今宵は三人寄て一升に仕づらうと存する時は八錢や十錢が酒を八九軒ほどの酒屋へ手前の小丁稚めに調へさせに遣しますが。殊の外島目の數に合せて見れば酒の升目が多ござりまするなど、笑ひければ。いよ／＼無庵手を置れ如何さま聞しにまさる奥ゆかしき人。今はれし人聖人の詞をまじへてのおどけ咄物にようもなれたる仁ならんと。一人心の内にて高右衛門を譖め。夫より盃など出して内儀とも近付にし。お町内へ先々月御廻宅にてお出なされしより緩々お意得るは今日が始て。自今お心安うお互ひにと挨拶。暮かたは手前へお出下されまいかと高右衛門尋ねられければ無庵も如何さま今日より御懇意を結びますため夕方私も參上仕りませう。夫は添けなし。しかば後刻と一體述べぞ歸られける。七ツ時分より無庵入來を待ちうけるとて書物などしなじな取出して机の傍に列べ置き。さて俄に

奉書の紙を取出し傷寒論講釋月並三八日の日難經講釋一六日といふ書付をして格子の間の鶯居に張り。床に墨跡の一軸を掛て唐様の柱掛をいくらもあしらひて待かけけるが。暮方に及び無庵入來の腰ばらひを聞くと丁稚に表の間を開けさせ其身は史記といふ書物の序巻を開き。見さしたる體にて挨拶しけるが無庵座に付て席のやうすを見られ。殊に醫書講釋までもしらるゝ仁。誠に頼母しく思はるゝも直なりき。高右衛門も今日は何日にな氣を張り酒を振廻はれけるが又詩經のはしくれを少し述べて僕約をいひたて順慶町の夜見世へ入文で講説を一疋とのへにやり是を鉢肴の第一にしての酒事。高右衛門内儀おたつ中々一げんにて俗人には逢はず。僅か三間ほどの内なれど出て逢はぬ見識なるが醫者だけにてか九ツになる娘のおかねを連れて出ての挨拶。高右衛門は無庵が兼て謹み居らるゝ體を見込んでの我常癖存分筋目よき出生と學文自慢と在所によき一門あるの咄。拙者なども國元に居ればたいまいの家督なれど田舎者になるも殘念に存じ先々月より思ひたちち先づ當地まで出ました。此上の望は京都へ上りて一向醫業にても行ふか。願はくは御歴々方へ仕官の望み。少々金子も用意御座れば當分はこれを去方へ預置きました故此足物にて家内五六人は何案じなく暮します。初で御入來下されし貴公へ斯様な打付咄は如何と思召されうが向後朋友になりますからは信ずてお出合ひ申す心底故内外の御物語りと誰に初て逢ても我身を上たくお定の口上。直なる醫師無庵何の氣も付ず尤に聞き一禮懇に述べて其夜は歸られる。或日高右衛門隣の紙屋十兵衛古手屋喜兵衛を呼んで集錢出して酒事をしが。此二人は高右衛門がお首尾を見て歩合心易くて借出能元手にせん下心。お前さまのお學文が無庵さまに半分やりたいとても療治で世を渡らねばならぬお人。せめて下男の一人も使はれるやうにして遣せたけれど一はいに行きかねる身代。又あなたのやうな節季々々にお案事のない結構なお暮して御療治なされいでもすむ御身分はお醫者のお學文まで委しくお講釋までなさるゝほどのこと。去りとは世界は意地の惡ひものとの追従。高右衛門の所では集錢出しの酒を飲て我が所へ吸物の五ツもして呼び入れ。未だ錢三文貰はぬに向よりは殿付しられて此方よりは極上の様付を

し。京の若狭宿へ歸てやり蒸玉鰻魚と若狭小鯛を駄賀共金一步で五枚づゝ調へ高右衛門が宅へ持行て大切な金銀を出しながら京の一家中より二十枚貰ひました内少しなれどおすそわけ且那にお上げ下されませとて裏包にして走りの折子かけにさげて置。ため紙のかはりに附木の一把も得取て戻らぬへに。是は珍者直にお持せにて一献仕らうまいかと又集錢出し。一人前に四十八文づゝの割付を出さるゝは笑止なりき。頃は極月廿六日のことなりしが紙屋十兵衛も古手屋喜兵衛も根が小元手にて仕廣げし身代故大三十日の首尾心遣ひ。女房が氣を付て北わきに奉公して居る時見覺えた金線魚の杉板燒の肴として呉てもほつこりと酒も和せず韻を擡めて咽を通し腹中へ入て少し心のしつかりとなるをよしとする茶碗酒無理呑をして居る所へ。高右衛門方よりの使ちよつと唯今お目に掛りたし喜兵衛も無庵老もたゞ今お出なされてとの口上。十兵衛も來春はほどを見て調達ことの相談も仕かける下心。早速使と同道にて行けるが。早や無庵も喜兵衛も座に付き十兵衛とも三人揃ひければ高右衛門盃を自身持出て。今日各方をお招き申すこと別の義にても御座らぬが拙者方少々悦ばしき筋常々御入魂にいたす朋友方なれば先づお三人へ早速お詰申すが信の朋友同士。共にお悦び下されへば。御存の通り北わきに名高き大銀持町人なれども筋目よきことは大坂は云に及ばず。京江戸までも隱なき寶盛傳藏方へ拙者娘お金を養子に遣しました。身代柄て申さば傳藏が身代と拙者とは誠に挑灯と釣鐘一向釣合ひませねども慮外ながら又筋目はまけぬ拙者。兩親は死なれたれど祖母や伯父や兄弟共が軒を並べ國元で指折の家筋。郡侍なれば帶刀はいたす。傳藏が家よりはまさるほどの筋目。則ち傳藏方支配人が國元の者ゆゑ手前から申さいても向に能知り。如何娘御を申し受度との願。あまり人に人を入れての所望故然らば進上は申さうが今四五五年は傳藏殿とお出合は申されぬ約束にいたし度と申せば。向よりいふは其日より御縁家にいたし度存れど四五五年は不遇お出合なしとのお好みなれば仰の通りに如何やうとも仕ませうと只管の願ひ。其處で俄の相談いたして昨日傳藏方へ養子に遣はしましたが。娘は仕合でござる直に傍にて御する小侍女。十一になると十六十七の女をお金が召使のため

この頃三人揃へしやうす。昨日も手代が來て云ふには何方へ連れまして参りますとてお歩行かせ申すことはいたしませぬ。お乗物に召させますは主人の家風。此間中にお金さまのお小袖三百色ほど早や用意いたされましたなどと申します。格別町家へ遣して悦と申てもござらねど先づ娘は仕合もの。拙者と違ふて喜の大きさと金銀の澤山なが重寶のみ是を御朋友かたへ贈しても不實と存じ則ち今日其方より到來いたせし祝義の一擲唯今開封して各方へお振舞ひ申し共にお悦び下さるやうにと存じてお招き申せし事。然し何もお肴のない譯は此擲に饗節を添へ餘は拙者無人故勝手をさつし吳しか外に此品御覽じ下されとて白木の目録臺に金二千疋すべて寶盛傳賊といふ下札の付たるを三人に見せ。蒲鉾一枚を薄う切たる取者にて酒をすゝめるが大坂中に隠なき有徳者の傳藏殿なる故十兵衛喜兵衛もがなり。無庵老何と思召す結構な所へ御養子にお出なされたではござりませぬか。高右衛門さまお浦山しう存じます我々共も大銀持様から參つた御酒あやかりませうと肴のない酒を數盃飲けるが喜兵衛が才覚らしき顔付にて。高右衛門様はお學文の上にて儉約を第一となさる故拙者が存じ付ますは此御祝義を三人して如何で致しませねばならぬ所をせずと唯今御祝義さし上る心で三人中間より一つお下さい物をしては何とあらうといへば。是は一段よろしからうとて十兵衛同道にて魚屋へ走り鰯の味噌吸物に品々取者を云ひつけ歸りてのしたり顔。やがて魚屋持參すれば是を肴にての酒盛。無庵も根が酒好なれど餘り者の中にこまり少々割付の出るはいとはず心よう今三ツ四ツは呑まれ魚屋にも間させて酒事にひれが付き高右衛門吸物をふるまはれて亭主より客へ御馳走と禮をいひ。下女丁稚を醉て見違へられしが。高右衛門娘や息子のやうに挨拶しられければ。亭主少し角立たる處にて兩人の者共は拙者召使ひの奉公人でござると云はれければ十兵衛喜兵衛は大望の願下地。特に大銀持の一家は出来る何なりといふて氣に入らんと。無庵老それは貴公に似合はぬ御口上。娘御は歷々へ御養子にお出なされた其御祝義を申して居る中でお召使の奉公人衆を御娘御様の御子息様がのとはきついお目連ひお醫者者がさう見そなうては

手前の妻が血塊と云お見立も矢張讓治では御座りますまいかなといへば。高右衛門せうら笑ふて無庵老も如才のない見へたむきなお人じやが處外ながらおぬかりは有まいが傷寒論を隨分よくお飲みなされ。醫書多き中でも傷寒論を能取廻さぬ醫者は何の役にもたちませぬ。得ては天窓付きと着物とは天晴お醫者で銀持のたいこにして重費記ばかりな療治人があるものと醉まぎれに我ぶられしが。喜兵衛が傍から是の先生のお學文はあらい物じやといへば。常に文才を面白に見せぬ無庵老も酒の上むつとして色眼をかへ。一言いはんとしられし所へ宿よりのつかひ。無庵様唯今お歸りなされませ久太郎町の揚米屋から急に呼に参りましたとの口上。療治用はのべがたく何もいはずと恨をかくし座を立てぞ歸られける。

## 第二

## 産れ付た癪瘍持の咄を聞て呑込む備醫の手柄段々

匙の廻るほど信仰をする近所の評判

附り 金居臺の下札に太う書附た能家の名前は遠くから見ても讀讀めぬ所の

ある手跡

御代も泰に猛き寅は早や千里の裏入してまた目出たう返り新參ねりと出勤しられし卯辰の初春。長閑に注連も明て正月下旬になりけるが無庵老は舊多高右衛門が不禮の大言。紙屋十兵衛古手屋喜兵衛が不興にせし高右衛門へのお前ついしやう。一杯飲まると思ひ出しての腹立。節季師走の人々相應に諸拂何が不埒せまいため心勢して居るものと呼よせ己が自慢と萬事工面のよいと大坂で名高い賛盛」とうの内へ娘を養子に遣りしをひけらかさんとて朋友は信を以てお出合申すが道なる故外の人へは嗤さねが各方面ばかりへ先早／＼お嘆申し必ず他の人へ御沙汰は御無用などとぬかして肴もない酒を振舞ひ客の方から吸物こしらへて啜はすやうなあほうらしい事があるものかと一人立腹して

居らるゝ所へ。高右衛門北隣へ七日跡の廿一日に宿かへて見へし事物を商ふ駿河屋七兵衛といふ男來り無庵老に逢て持病の痼疾あることを語りお町内へ参りてやうへ五七日になる私お馴々しう存じますれど何時お療治お願ひ申しませうも知れぬ病身もの故先やうすをお唱し申上置きます。人様の事にても隨分なるべきお世話などは致しまして心は如在なう存じます私なれど唯痼疾故か少しの事が苦になりますて扱かりぞめにも腹が立ましでどうもなりませぬ。痼疾の起りかゝります時など頭高い我ぶる奴やなどに逢ひますと。そいつめが生面を横槌てはりいがめたうなりますといへば。無庵老も舊多の事を思ひ出して小腹の立てある所故。なるほど貴公の痼疾も餘程強う見へます。總て其やうなもの貴公其御持病には惡しい所へ宿をかへてお出なされたは。お隣の己讀多高右衛門扱も大ものつきのせい言第一人を見下す男と。いひも終らぬ内に七兵衛氣を急き聲をかんぱりにして。さう仰せられまればお唱が申されます。私は又あなた様も高右衛門めと御懇意のやうに承りました故。さし控へて居りました。御存じの通りお町内へ變宅いたして参りましてやうへ八日になりますが。もう高右衛門と物いひが出来さうになりました。南隣の十兵衛殿は家主が違ふてござりますが私と高右衛門は合借屋敷に裏は一所の住居。も高いきにうせおつて答へられませぬ自慢唱。宿がへしてさんじまする日挨拶致しましたれば貴様は何を商ふと尋ねました故千物を商ひますと申しましたれば。體節はあるかと問ひます故土佐の上節が御座ります御用なら上させうかと申しましたれば。今では此方にもよい體節を所持いたして居る。これ見られよと五六本取出し。此節はよいはづじや北の寶盛傳藏方より到來せしと申します故。アノお前様寶盛へお出なされますかといへば。行くくらいか拙者娘を舊冬段々所望故養子に遣したとぬかして。それから様々のものをつき其身を高ぶり居ります。時に私が女房の妹聟は寶盛の手代。中年で暇を貰ひ親の跡相續の願ひ主人聞届けられ今に出入もいたしますれば寶盛一統のことは何によらず委しう承ります。傳藏様の方に娘子は二人あるに如何いふことで高右衛門が娘を貰はれしやらと存じ。幸ひ家見廻に参りし故尋ねて見ましたれば中々それは尋

もないこと。何の不自由らしい高右衛門とやらが娘を所望して貰はれませうぞ。娘子養子したいと思はれますれば賀盛一統の旦那方に娘の子達はお妾腹の子共衆よせれば八十人の上もあり。一かう他から養子は致されず。殊に去年の多賀盛一統旦那家の妻に出来た子共衆の向は皆々お銘くの本家へ取よせられ。妻宅は子達なしになりしが傳藏様のお妻は今橋の北横町に居らるゝお幸といふは生れ付ての我ものにて昨日まで守育して主人の娘子を本家へ取られ跡がさびしさに養子がしたいと行くほどな人に頼まるよし。若し其ことが何分旦那の名が出ては聞ながらしにもならぬといふて其日は歸り又翌日参りて申しますは。いよ／＼此妻の所へ高右衛門が娘を養子にせしよし運ひなし。此節方々へ高右衛門があまり娘を賀盛傳藏が所望する故養子に遣したといふよしと貴様のお咄て聞しがどふも聞すてにもならず。則ち賀盛の番頭へ鳴したれば外からも廻り／＼て昨日旦那のお耳へ入りし故直に妾宅へ人が行き急に其養ふた子を不縁にせばよし。さもなくば妾ともに暇を出すとのいひ付け。彼の氣體な妾も面目を失ひ其日娘の世話を呼び何の子細も云はず不縁を云たて。今日お金を戻し申し度といへば仲人聞て先其様子を高右衛門方へ行て云聞せしが大きに立腹して仲人とつれだちて妾宅へ行き理屈をこねまはしたれば又妾の方からも一理屈。その様におねだれなされば此方よりも申さねばなりませぬ。元此の子を戻しますことは旦那傳藏様よりの云付でござります。其のわけと申すは此お金を手前へ貰ひました明る日五升樽に鰯節。不通の貰ひ切と申す約束に金子二千疋遣はしましたれば其の進物を御近所のお家を呼んでお見せなされ。賀盛傳藏が拙者筋目よき事を聞きどふぞ娘お金を養子にくれいと人に人を以ての所望。傳藏は大坂一番の有徳者なれど筋目は此方が百倍まさる故遣すことも餘りすかねど段々手を入れて頼む故せひなく遣したと仰られ。私からへぎにのせて上ました二千疋の金子を白木の臺にお乗せなされ下札に旦那様のお名を書付け人々にひけらかして御酒をお振舞なされましたとのよし。其時御近所の魚屋へ娶物を仰付られましたけなが其魚屋も御酒のお合などしてお咄を聞且那の名札も見て歸た養子。則ち此魚屋の娘が本家の暖簾内に奉公して居られま

す故。此正月の藏入に宿へてお前様の事を聞いて戻られて嘆しられましたが。つい腰籠中宿持手代衆の耳へ這入。且那様へも聞へて大きに御立腹。急に養子娘を暇やれ。のび／＼にして置くと私までも追出すと嚴い仰付。さうすると出入の衆が方々で見て見へましてばつと成ました故斯様な首尾の悪さ申さばお前の方から不義をお好みなさるやうなもの。なぜ其やうな嘘をおつきなされますと世話人の聞くまへてすつかりといひけるが。高右衛門は顔を赤め一言の答へも得せず娘を通て夕べ歸つたに違ひなし。叔本家へ年々禮に上る講談の問屋が昨日來て高右衛門がやうす問ふたれば此男が委しう知て居て話し。其高右衛門と申すものは丸龜にて質屋をいたし居ました作兵衛と申すもの。今年三十五六になりませうが廿三四より學文を心がけましたが子供の時からうそつきのたんくわもの。其くせしわい欲の勝た奴にて所中ての懲りもの。兩親の無事な間はそうもなかりしが六年前の七月に親父が死。五年前の霜月に母親が死てから一向所中云合せて付合せず。高右衛門一家一門に相應な暮しの商人共あれど只小學文を鼻にかけて利口ぶると片意地などにあぐみはて。一門一家も他人同然内證は義絶して寄付けず。論語讀の論語知らずといふて講談一國に懲まぬものもないくらいになり。誰も質置に行かぬやうになりて段々の不仕合。二人の手代も見限り奉公を引て是非なく家屋敷を賣拂ふてよほどの借金を分散して金五十兩残し是を所持して女房と三人の子供をつれ京へ上り。去お醫者の所へ五十兩もつて相續に入しが下地少し小學文もある故彼のお醫者方にて傷寒論の書物など少し小半分ばかり覚えて講釋も四五度は聞たよし。夫から又至りもせぬに醫學の自慢を仕出し。只人々に高う行て萬に負惜みをする故、此お醫者殿の風に合はず。我も度々喧嘩して五十兩の持參金入用何角に不足して三十兩返し。去年の秋大坂へ下りて難波櫛筋に小座敷を借りて居るよし。則ち體な事を承りました。今下女といふて使ふて居る十四五な女は高右衛門が物領娘。丁稚といふは次男の息子。九ツになる今度妻の所へ養子にゐてもどつたは妹娘。此妹ばかり高右衛門が娘と見せて残りの子供は奉公人に仕込み。三十兩の金を又何か入用に欠を立。残りて廿兩の金を親子五人が居喰そろ／＼高右

衛門も肝の済なつたに負惜み。うそをいひ覺へしとせいを人に聞かせて我身を高ぶるとを幸ひの元手にして大きな築山を越向する下ごしらへ。近頃は近所隣の町家の衆を呼びよせて集錢出しの酒事をして例の大言鐵炮の上手な自慢して人をふづくるそうに御座りますと問屋が委しの唱を仕ましたと。私女房共の妹聲が申されましたと。七兵衛息もつがす語りしが無庵も始終を聞かれて横手を打ち。とんとそれでよめました。下女めも丁稚めも高右衛門が顔によう似たと存じた。元それからおこつて薦多も少々云分が出来ました。扱て其時金子二百疋乗せた白木の臺の下札。寶藏傳藏といふ名前をば遠くよりも人の目に顯るやうに文字大きさ太う書て御座つた故。拙者愚案に存するは寶盛一統などは町人なれ共筋目よきもの。殊にお大名方屋敷々の漁物何か格式ある存じゆれば。なんぼう同輩といへど彼のやうに名札を大きさは書かぬもの。とんと開帳か萬日の下札見るやうに書付は如何なること。定めて祐筆なども抱へありつらんと不思議に思ひしが扱は高右衛門めが手跡ならん。拙者が不思議うつとも知らず只人の目に能見へるをよしと思ふて文字を大きさ書きをつたは。あれほどな虚言いふことの名人めでも一つの穴。ハテ委いお唱を承つて拙者も少し腹がふましたと種々看調へて七兵衛に酒をすゝめ居られしが。高右衛門合口の紙屋十兵衛女房あわただしう無庵老所へ走り来り。只今急にお見廻ひ下されませ。十兵衛殿が目をまはされましたと云て歸りしが。氣にくわぬ十兵衛なれと療治は別のこととて早々見廻はれければ。歯を噛みしめてふんぞり反りとんと正氣なし。無庵心に思はるは去年少し申分せし故療治そまつにせしと云はれては醫業の仁心すめず。遺恨はるこん療治は療治とするが仁術の道とて。格別に心を盡し鍼藥など施されし故か。三時ばかりして正氣付きけるが。無庵老は其夜十兵衛方に一宿しての療治。十兵衛夫婦醫師の親切なるを感じ入りぬ。病根をおせば心氣の痛みと勤酒の内損より出し事にて甚だむつかしきやうするが。無庵老の見立よく服薬的中して三十日ばかりで過半全快に向ひけるが。無庵養生の心得に事よせて彼高右衛門が不實なる咄。干物や七兵衛親類に寶盛の手代ありてみさいに聞きしこと共を唱されければ。十兵衛も

思ひ合せる事ある故初て氣が付き。古手屋喜兵衛を早々よびにやり。無庵老に聞た委細を呴しければ。喜兵衛も赤面。十兵衛と顔見合せておはづかしいは無庵様への手前。齋多も高右衛門が所でお前様をなんじてうそつきが氣に入つたさの追従輕薄。誠に未練な町人根性と嘸其時もお笑ひなされつらん。おわびのため何もかも白状仕ますとて喜兵衛が語りけるは。去年の九月に高右衛門めが當町へ參りましたが。御存じの通り私は北筋向ひ是の十兵衛殿は南隣。今千物屋の居られる高右衛門が北隣は其時分は明家の時。或夜十兵衛殿が私に呴されますは。こちらの隣へ宿かへて見へた人と折々呴し見るに扱<sup>て</sup>筋目もよい人。生國は譲<sup>て</sup>の丸越邊で銀持の鄉侍なれど田舎を嫌ふて大坂の住すまる。國から持て見へたあり銀を廻し其利足でゆつくりと遊び暮し。したが<sup>て</sup>はきつうする人じや。總て銀持はあんなもの。餘ほど貸付のあるやうすを見届けしは十月の晦日にふと我等を呼にくして酒を振廻れ。何かと呴の跡で少々錢を買ひたが此近所で兩替屋は何れがよからうと尋ねられし故。兩替ならば私がいつも取引いたします<sup>て</sup>堺筋の萬屋へ仰付られませ。なんなら只今私が參り錢を持てこよと申して參りませうといふたれば。然らば三兩か錢をおかい下されと云て金五拾兩ばかりの封を切り。拙者へ三兩渡されし故。是はよろしい物を澤山に御所持てござりますと挨拶したれば。去方へ此度少々貸付ました金子。六ヶ月の利足をとりましたが是ほどござると云はれし故。六ヶ月に五拾兩といふ利足はあらまし一分の日合にして見れば千兩といふ貸付。今は斯<sup>べ</sup>く約にして居れど末にては<sup>い</sup>もあるといはるゝは聞へたこと。常きぬものに下女丁稚を使ふて遊びくらされても氣遣ひない身上。學文を好んでおびた<sup>て</sup>しう物を入れたといはるゝもこれなれば尤<sup>と</sup>おもふ内に心付きしは。一口に千兩も貸付る位なれば外にもまだ貸付があるであらう。しないで感々銀持といふ段が見へたと。是の十兵衛殿が私への呴。拙此一二年十兵衛殿と相組て銀もうけの譲談を工夫いたし居りますは。京の川東に唯今幸<sup>いと</sup>御座ります一町四方ばかりな新地を買ひ。數多借屋を建て貸し。其内にて<sup>て</sup>所よきかまへを間口三十間に奥行五十間ばかりの家を立派に建。門口は十間づゝ三ツにして水引暖簾は一所に渡け。

色酒戈といふ三字を横に大きう書付て。一軒は女郎三百人は抱へて盛子素人の廻し見世。中の一軒は大杉林をつくりの造り酒や。残る一軒は金銀山の如くに積みし兩替見世。三軒内は一所にして色酒戈屋喜十郎と二人の名を一つにして一ぱいあてますつもりの相談最中。何を云ても二三人銀主がなければ出来ぬ仕事。先此高右衛門殿を一人の銀主に取込む積り。こんな厚うして置き。春は早々云出して頼む相談を去年霜月の朔日から十兵衛殿としめし合せ。扱二人が高右衛門方へ行き。しわい合點で付合ひ。いつでも集錢出しの酒を飲んで是のうちや私の方へ呼ぶと吸物の二十もこしらへての馳走。酒の上で聞くほど田舎に大銀持の一家一門ある噂。嘲々面白う思ひまして俄に我が方もこくな内も疊の表がへ小普請などして入らぬ諸道具を買ひ。内證の體をよく見せかけて高右衛門を新町へ連行て振廻ひ。夫といはずに銀振廻しを噂して見れば。來春は貴公方へ御内談も申して見る筋があるなどの首尾。冬中いろいろと物を入れて付合ましたが二人の仲間で三貫八百匁の借銀。當年になつてそろく一件を頼みかけうと思ふ内是の十兵衛どの病氣。貴盛傳威殿方へ奉子に遭た娘が戻つたといふ近所の噂。どれぞへ預けてあるか内には居ぬといふ人もあり。どうやら君子の心元ない。若しつまゝれはせぬかと申しましたれば。十兵衛殿はそれ聞かれてより不快に二三日暮されしあげくに先月俄の眩暈。今日貴公様のお嘔で何もかも注文が合ひます。そんならばとて今は是ぞといふて高右衛門めをねだりやうもなし。とんと我等は月夜に釜躰の高奴に引抜かれしと。一人が眼に角立て頭をかくこそ道理なりき。無庵も今は氣の毒に思はれ。鬼角仕覺へられた商ひ一道に掛つて御座れば斯様な無念もなけれど。色酒戈などと云ふやうな大きな思ひ付をしらるゝ故高右衛門等につまゝれめさる。其上病氣を出し是が全快に向ふたてこそあれ。死やなどすればほんの大に喰殺されたやうなもの。向後高奴がこと思ひ忘れられよ。君子は己を悪んで其人を罪せざとあれば。此後銘々萬事を償まれよと誠に文才ある無庵老の意見を受け。二人共發起し。十兵衛が大病も愈て後とんと大きな願望も止みけるが少し止みかねるは高右衛門が是までの虚言を憲ひ出すと立つ腹。切てもの意趣返しとて十兵衛

本復振廻に事寄せ無庵老を上客にして高右衛門。初千物屋六兵衛など其外向ひ隣の人を招き。いろへ馳走の上、喜兵衛が高右衛門に云ひけるは。六兵衛様のお咄承れば其もと娘御貴盛妾の自分養子に遣されしが。貴公の口から。不様のやうすを聞きましたが。又何所ぞへ遣されましたか。是から何れへ遣されふとも人には有體に咄しをなされ。なんばう廣い大坂ても虚言があるとかいはけが現はれますといへば。六兵衛がいふは讀破から登られた間屋の忠兵衛殿に承りますれば。貴様は質屋の果じやげに御座ります。今下女じやといふてお使ひなさるは貴公のお娘御。丁稚殿も誠は御子息じやと申して居られました。如何さま質屋をなされたほどありて感の深い御工夫といへば。無庵老が貴公は先年京都で醫者方へお内義も三人の子供衆も連れて奉子にお出なされた時。一二年醫學を薦まれたとの咄しを去方で承りましたが。一年や二年のお學文で傷寒論講釋などといふれば能うもお張なされました。去りとは御器用なこと共と三人心を合せて難じけるが。高右衛門が奥はひとつしやり頬窓の見ゆるほどさし俯き居られしが。此體を見て各々腹をゐ。喜兵衛十兵衛小聲になりて去年からしたかつまゝれた恨を齎すに又美味料理喰せるとは。初も珍な事かなと一向笑ふて興を催ふしけり。

赤鳥帽子都氣質 卷之五

第一 唐まで聞えたよい女房持た男の自慢顔が少し五月蠅髪の生際

附り 一時に出る人魂が行當りて兩方へ颶と別れた丑三の夢の様なまこと

古語にも男子は外を云。女は内を治むるとあれば。人の身代も夫婦中能こそ宜なる哉。近頃評判のある都五條邊に能子屋六兵衛とて刻煙草やなりしが。宿ばいりかり五年目に少々内證の手組よふして近在の小百姓より廿一になる女房を呼迎へけるが。丁稚一人使ふて家内三人睦まじき暮。此女房おたか嫁入して來た當座半年計は在所の土氣退かず人目にもからざりしが。地が色白にて顔の道具そろいそらうとしたおし立て髪長うして黒き事漆の如く。總身に愛敬深き生れ付き。京の水がしゆむ込むほど日々に色白く土氣はなれ。二年計立つと仰山に云ふ時は廣い日本國にま一人とあるまじき女房。通筋ゆへ往來諸人の目に止まり。江戸長崎近年は唐まで聞へし美形の女房。扱も此夫六兵衛こそ仕合者。よい女房を見んが爲に煙草の賣れる事は朝から暮まで物質の絶る間なく門前に市をなしてめきりく銀をのばし勝手ゆるりと暮けるが。亭主六兵衛は我等が女房のやうなよい器量は世に二人とあるまじ。何程の有徳者も是程の仕合はまねもならぬ事と明暮女房自慢顔するも尤なりき。此六兵衛直向ひに賛付油元結萬小間物を商ふ黒田屋嘉兵衛といふ者ありしが。亭主嘉兵衛は町人にしては惜い程なよい男。色白にて中じょ品のよい事は十日湯をつかはひでもさつぱりとした奇麗なる産付なるが。扱も繊は異なるものにて此嘉兵衛が女房は珍しい程色の黒いつゝら短い肥りじよ。顔の工面の悪ひ事ぶ形な樂焼の茶碗の如し。女房は世に男も多いが我程なよい男を持ちし仕合者は廣い日本に二人と有まじと明暮自慢するもことわりなりけり。かほど不器量なる女房なれど縁なるか我が目にはさほどにも

思はず不便を擇けるが。向の煙草や六兵衛が女房一二年此方目切と器量を仕あげ。京中評判に立つほどの風俗にて往來の貴賤此女房を讃めぬものではなく。煙草商も無目して身上も仕上げける故。變り易きは川の瀬と男の心。いつの頃より嘉兵衛不圖思ふやうは。さりとては向の女房は美しい女。毎日々々向ひ同士で見れば見る程見ざめのせぬよい女房。六兵衛は大きな仕合もの。いやまた一生つれそぶ一人の女房あのやうな美しい往來の者まで見とれる器量よしを持たば喫うれしかりそうな者と。蒙ましきより我が女房の色の黒いがもう二目と見られぬやうに成り。明暮是をしんきに思ひ暮しけるが。思ひうちにある時は色外に顯はれ。日々夫の顔付あしく不興になる上。往來の荷かち持などが煙草屋が門にて孰も杖をして六兵衛女房を譽め。又北むいて嘉兵衛が女房を見てはくつ／＼笑ひ。北側は黒し南側は白し。これは此町は昼夜町とは云はぬかなどと懶口云ければ。嘉兵衛女房おすが無念の涙に可惜月日を怨みて暮し。夫の心水臭うなりしも向のおたかが器量よく京中で評判する故我が身の難儀うらめしや／＼と思ふ女の一念こり。おたかを兎咀心になりけるが。刲も世の中はさまよ。六兵衛女房おたかは我器量よく。往來のもの迄が毎日毎日立止り老人或はお侍衆などは道に人がら故立止まり見るならず。歩行き／＼煙草屋の見世を穴のあくほど眺め通るゆべ。れき／＼のお侍が石に。けつまづきこけらるゝこと鏡に向ふ度毎人の見る度に我ほど器量よう生れたものはあるまじ。二親がもつと嫁入を待たるゝか。よい世話を頼まれたら刻煙草や位でなく共當貴な。吳服屋が銀がしなどの妻にもなられそなるものと。不圖心付きしより夫六兵衛が頭の禪這姫と髪の薄いと少しの出歯とが五月端午目につき。向の嘉兵衛が人品よく立派な男振を見ては心を迷はせ。身代はともあれせめて向の嘉兵衛どののやうな男を持たば嬉しからん物と。明暮是をしんきう思ひ。朝夕顔見合せ時分の挨拶するにも。近き頃よりしなつからう少し思ひの色に見へけるゆべ。嘉兵衛女房愈々立腹して折節おたかが來て物もいはざりければ。おたかは又嘉兵衛女房が悟氣ゆゑ我がようなるよい器量なものゝ行くのを五月端午がると思ひしは女の惡心。あのおすがゝなくば嘉兵衛殿

と密々にて契を込め我が夫六兵衛殿も大切にして心のうちは嘉兵衛殿を本の男。六兵衛殿は手かけの男の心であればすむことと思へど。あのおすがめが有ては出來ず。不器量な癖にのふずな女子め。何卒あいつをつき殺してこまし度ものと愚痴な女の一念。日に／＼まさりけるが。或夜しきりに怨増し一向我が魂嘉兵衛殿女房につき。暫時なりと男に持て見たきと思ひ／＼其夜寝にけるが。女の念力おそろしや夜半過に魂ぬけ出で。火の玉に成て向の方へ行かんとせし時も時とて。嘉兵衛女房はおたかを日々積る怨み。付き殺して思ひを晴さんと思ふて寝けるが。不相談やは是も魂火の玉になりてぬけ出で。煙草屋さして行かんとする大屋根の上にて。おたかの魂の火の玉とおすがが魂の火の玉とべつたり行合ひ何かは知らず。暫時擦合ひ挿合ひして兩家へ颶と別れて入りけるが。おすがの魂はおたかが寝身へ這入りおたかが魂はおすがの寝身へ入り互に付殺さんと思ふに。双方脱體の所へ正面よう這入りし魂なるゆへ。付苦める主人なければ罪も怨もなし。おたか心に思ふは我が身體はおすがの形となりたれども魂は矢張わし。一向これで一生嘉兵衛殿にそふてゐれば思ふ男を不義のものと云はれずに我が夫にするといふもの。若又こゝへおすがの魂が良つて來たら取殺すばかりの事。最前屋根にておすがの魂の火を見た所が。大方わしが脱け出し身體の内へ這入りたに違はあるまじ。こゝへおすがの魂良らば取殺してそひ送る。我身體は脱體なればおたかは死んだと大兵衛どのが悲しがらるゝ計の事と。工夫廻らし喜び見るうち。はや夜も明れば何喰はぬ顔して起き。見世の掃除などすれば。向の煙草屋の見世も明き。おすがはよい女房の姿をかり珍しそうに顔をなで／＼見世へ出しが。はや往來の人が眺め詰めて通る故心面白く。おたかめは嘉兵衛殿をねとりをつたは憎けれど逆も水臭い夫嘉兵衛。此美しい身體になるにはかられず。今こゝからわしが元の身體を見れば見る程色の黒いきたない顔形。初も五月蠅やのういや。今日より變見る度の罪は造らじと心の内にて大きに悦び。見世より向のおたかが顔を見付舌出してにつと笑へば。おたかもおがの顔を見。くつくと笑ひ互に云はず。語らずと怨嘆らして夫を大事に勤めけるが。煙草屋の六兵衛は何の氣も付

かず女房の聲の變りしを不思議々と思ふて喜せしが。おたかは互に思ひ思はれし事兵衛故、或夜私に様子を語りきたない顔になるもお前を思ふ故と話しければ嘉兵衛も嬉うはあれど。おたかが元の姿義にてそ戀もありたるもの。下地の黒い女房の形でてくてはさりとは嬉し迷惑な事とて明暮頭搔であるよし。餘り珍しき鶴りなき物語なる故。龜友が廻らぬ難を加へ世にある人に曉するも。少しは雨中の徒然の慰にもならんかと思ふのみ。

## 第二 二度とない若い時も時なり折も用意の蜜柑饅頭を

### 拾ふて悦ぶ近年の大當り

附り 料理人の手の内は見事に止めし刀のきつさき柔に

#### あしらふた三味線の早菜

四季折々と四方の風景春の花夏の涼み秋の月とわたらうちの雪の景色。まつ前かた九月下旬神無月とうつり變るは山々のてり葉紅葉の色染めて老若貴賤のうつづくまで拂ひ給ふや參詣の身も清めたる吉田山にひきもちぎらぬ遊山の諸人。其處此處に暮うち廻し石の籠にうす鍋のわびたる手前ほらしき料理好ぞ樂しける。女中まじりの長歌や娘子供の流行歌遊になんなき神山の影に。一群暮打て趣向も深く樂しみゐるは京中の若息子。十人計の一連中。めんく粹と心得し遊藝じまんのうてんつ群。一際目だつ裝ひなり。美形の藝子三人入てさいつ抑へつの酒事大はぎになる勧はお定りの櫻づくし。猛き心は虎の尾を履むより危い若人の元氣邊に樂しむ内義娘侍女下女が見る事の嬉しさ。たまらぬ／＼かんまへて沙汰なしにと平假名の千鳥が臺詞を久米太郎て次へ渡せば。源太が所作を三五郎て身をして見せるが餘念なき秋の錦ぞ色々なり。此連中の二三間上の山手に席を取りしは上京の若人一群。負す劣らぬ十人連美なる舞子三人入れ琴三味線尺八にて長歌の撮合。酒事しつほりとして樂み居けるが彼中京の連中は上もなく粹自慢。さ

はさは恐らく山の大將と思へども見物の貴賤老若今は上京連中の舞子がしつぱりとした琴三味線尺八の音にはだされ是聞事とて口々に詞にも述べ面白げに此一群へ立よりしが。中京の若手負惜の立腹。今は一向滅多に説き謗の邪魔して樂しまんと三味線を太鼓にして茶わんと酒注を打叩きて壬生の狂言。器量自慢の若息子が身ぶりよを捕取の女形。ちやり自慢の一息子が半道化の相手になるやら。中て身軽な猿息子が松の木へ登りての輕業。是には見物の女子供は云ふに及ばず。年配な人までが面白がり。中京群の幕際へよりて讀しが。今は幕もはづして是見よがしの大さはき。上京の連中も皆氣の高い負惜にて見て衆の散たる無念がり。連中互に耳語合てさはさの趣向只上びたがる此一組。幸壽に精い三人の舞子共に云付て花やかに狂言。千本櫻で忠信の狐の段を三人が掛けにて勤め。淨瑠璃自慢と三昧線自慢の息子共が舞の地をして聲のよく面白うしつぱりと語り出せば。是は又格別の見物事とて。此度は中京のさはぎを見入たる人々が。根柢に残らず上京連中の幕の邊へ立よりし故。是も幕くしづぱり上て見てくれの自慢。中京一群少しせきが來て色々工夫すれど。上京にて名ある上手の舞子三人が狂言して見せし所へ。追ふ舞子の舞も出されず。様々心を碎きてよふ／＼趣向せしは四季の樂遊びと半紙に書付て松の枝にさげ。最初が正月とてをとけ萬歳の所作を春の部に取組。初御こしはらひの心にてにわかを幾らも思ひ付て夏の趣向。秋の所は格別の大當は。舞子三人連彈にて伊勢首頭。さては大坂島の内色茶屋掛行燈の家名寄などを謡はせ。連中残らず立て雀跳。是にて又見物集まりけるが冬の所の趣向は扱もとんだ思ひ付。此間に用意せしが杉ばしの新らしきを三百せん持出て四角に高く積み。是に火を付てお火焚の心。連中残らず打寄て藤子交りに三味と合せて大聲あげ。たけ／＼お火焚けのふ山の神のお火焚けのふといふたれば。見物の子供が同じ様に藤子饅頭ほしやのふといふて喜ぶと酒機嫌の若い者共が拍子に揃つて囃せば吉田山中に樂みるよい機嫌な樂が珍しくと駄付けてお火焚けのふ／＼といふて喜びけるが。いつのまに整へ置きしや青竜柑と饅頭を夥しう取出して蔵散らしければ。子供大供の差別なく。我も／＼と競合ひかち合ひ給ひ

けるが。是にてあたりのさはぎを打消し。中京連中山の大將して懲々調子に乗り。數百の賣相餓頭薄散らしてされしゆへ。山の麓へ買に人ばしかけて柿を二三百時きけるが。折節向を通るお侍浪人體のなり風俗黒羽二重の小袖に黒縮緬の羽織。目計出る頭巾を引かぶり。朱鞆の大小しこなし行く人の左の頬べたへ柿を物むごう打當れば。彼侍大に腹を立てあたりの者に様子を尋ねられるは。遊山の人がお火焚のまねをして遊ばるゝといふ故。懲々の立腹。其體中京連中の傍へ行て頭巾着ながら大に目をむき。につくき素町人めうねらが遊びほたへんと吉田へ參詣の身共に滋柿を打付る。法外の騎者め不禮とやいはん不義非道なる大馬鹿めら。一人も其座は立さぬ。柿打付けた不禮ものめを身が目通りへ出しあがれ。大げさに打はなすと。刀のそり打とい口くつろげ。にがりきつてねめ廻せば。上京連中は是を見て扱もよいきみ。餘り負惜してこちらがさわぎを打消さんと物入て急りをる故あのやうな大難義と。酒事止めて見物すれば。數多の人が暗暁よ／＼と推合て我先にとの見物。辨當特に雇はれし忠介と云若い者少し腕に覺ある力強の元氣もの故。彼侍の前へ出て両手をつき頭を土に摺付けて。恐ながら只今柿をお顔へ打ち付けましたは。則私遊の興にいたせし事がそぞうにて思はぬ御不禮。畢竟御相人に足らぬ町人でも下男の拙者め。重々誤り奉りますればお免し下され。御慈悲に命をお助け下されなば有難う存じますとしとやかに詫けれ共。中々侍合點せず。何了簡とは惜き一言。武士の面に疵付けられ許してかへれば刀の手前も云譯濟ます。覺悟ひろげと羽織ひんぬき刀するりと抜きはなし忠介に切掛ければ。四夫なれ共ぬからぬ忠介。傍に有合ふ三味線にて氷の刀をはつしとうけ。沈んで拂ふさそくの早業。打合々互に輕衡を盡せしが。手ごはく打たる侍が刀に三味線切落され。人々是はと驚く内に連中のだんびら物取。ぬく手も見せず侍に。胸打一ツ眉間にあてしが。うんと斗に息たゆれば。なみある諸人一時に色を變じて驚きしは理とこそ見へにける。是程の事になりしに何思ひけん藝子共が二上りを引出せしが。最前源太の身振をせし物まね自慢の一人の息子が中村吉右衛門が身振物まねにて。ヤア／＼兩人の藝者共。申付た通の仕組狂言けがな

ふ出來て満足<sup>まんぞく</sup>。是にてとんと此連中吉田山の御大將。ホ、ウ目出たし。いざお侍役の大津や若八段同大津や  
玄吉殿も御酒一ツ。是へへといへば。件の侍頭巾を取り。是は旦那お有難いお盃<sup>おさか</sup>まづ頂戴<sup>おどり</sup>といふと。辨當持役勧め  
した太<sup>おほ</sup>誠持の玄吉が。さりとは若八の仕うちは甘い物じや。いや貴丈<sup>あなた</sup>もさるものじやと連中打より是を今日の大はねに  
しての酒事。上京群<sup>じゆう</sup>の若息子共も山中貴賤<sup>きせん</sup>の見物もとんと我をりて。辨當もつかはず一日珍<sup>めずら</sup>しい樂み。はや秋の日の  
暮前<sup>くわん</sup>なれば大方段々<sup>だいぱん</sup>山より下りしが。此連中は夜に入るまで酒盡<sup>さけん</sup>して初夜に吉田山を立ち。野道各々<sup>よのじ</sup>つれぶし謡<sup>謡</sup>ふて  
京へ歸りしは。罪<sup>つみ</sup>も報<sup>むく</sup>も後の世も忘れ果たる面白さ。若い元氣は益々<sup>ますます</sup>と吉田戻りや一興を、辰の初日<sup>とら</sup>の讀本に綴り  
綴りて僕<sup>ぼく</sup>も又。亭主の好<sup>す</sup>な赤鳥帽子。自慢<sup>じまん</sup>盡<sup>つく</sup>しを取組<sup>とりあ</sup>て。世に有る人に見せ侍るは。恐<sup>おそれ</sup>入りしと斷<sup>ことわり</sup>を。いふのもけつ  
く自慢氣質<sup>じまんきしつ</sup>にならんや。いづれに是は許し給へ。